

私の戦争体験

令和 4 年 6 月

江差町教育委員会 編集／作成

江差町教育委員会では、令和３年５月に策定した『江差町教育推進計画（令和３年度から令和７年度）』において、推進計画期間中のテーマを「ふるさと江差に心の向く教育」とし、その具体的取り組みとして「ふるさと江差発見事業」を実施しています。

「ふるさと江差発見事業」とは、学習指導要領に基づきながら、地域素材を活用した授業を学校の考え方に副って展開していくことです。

例としては、江戸時代から地域に伝わる民謡「江差追分」を素材にして、各学校が音楽の授業や総合学習の授業などで授業展開をしています。

さて、江差町教育委員会では、先の大戦から６０年の時を経た平成１７年に町内の方へ戦争体験の聞き取り調査を行い、話者のご了解をいただいた上で、平成１８年に『私の戦争体験 ～６０年前の記憶～』と題した冊子を作成しました。

聞き取り調査から１５年以上を経過し、残念ながらご他界された話者の方もいらっしゃいます。

江差町教育委員会では、この貴重な体験談を学校教育や社会教育の場でさらに活用させていただきたく、さらには話者の想いを確実に後世へ伝えるため、『私の戦争体験』として再編集して広く公開することとしました。

改めまして、貴重な体験談をお話しいただきました方々へ感謝申し上げます。

この冊子が様々な場で活用できれば幸いです。

令和４年６月

江差町教育委員会

～ 目 次 ～

い がわかつえい せんそうたいけん
井川勝栄さんの戦争体験・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 1 頁

たか の せんそうたいけん
高野コマさんの戦争体験・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 6 頁

あかいし ふ き せんそうたいけん
赤石富貴さんの戦争体験・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 9 頁

たかはしひろし せんそうたいけん
高橋 広 さんの戦争体験・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 14 頁

きし だ とみ じろう せんそうたいけん
岸田富二郎さんの戦争体験・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24 頁

いしばしふじ お せんそうたいけん
石橋藤雄さんの戦争体験・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 28 頁

いた や こ せんそうたいけん
板谷トシ子さんの戦争体験・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 33 頁

まつむらたかし せんそうたいけん
松村 隆 さんの戦争体験・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36 頁

やまぎしじゅんいち せんそうたいけん
山岸 淳 一 さんの戦争体験・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 41 頁

なり た き み こ せんそうたいけん
成田喜美子さんの戦争体験・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 44 頁

もり た けい こ せんそうたいけん
森田慶子さんの戦争体験・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 47 頁

井川勝栄さんの戦争体験

■お名前

井川勝栄 さん

■生まれた年

1911年（明治44年）

■終戦時の年齢

満34歳

■聞き取り年月日

2005年（平成17年）9月16日

■戦時中・終戦時・戦後にいた場所

戦時中 ハルビン

終戦時 ハルビン

戦後 ハルビン→牡丹江→シベリア→江差

■戦争が始まる前

1918年（大正7年）に上ノ国（北海道上ノ国町）の河北尋常小学校に入学して、6年生まで通った。1924年（大正13年）に江差の柏樹高等小学校（江差小学校の前身）に入学した。姉が五勝手（江差町南部）に嫁いでいたので、そこに住まわせてもらい、3年生まで通った。

柏樹高等小学校の運動会を松ノ岱グラウンドで行なった。

1931年（昭和6年）になって小林牛乳で働いた。リアカーに牛乳を積んで、毎日午前と午後の2回配達をしていた。

20歳の年に徴兵検査を受けた。場所は柏樹高等小学校の校舎だった。徴兵検査を受けるために各地から多くの人が江差へやって来た。そういう人たちは、詰木石町（江差町字愛宕町）のマルダイ竹内旅館やヤマニふじや旅館に泊まった。

その後、1934年（昭和9年）に江差の郵便局に勤めた。

1939年（昭和14年）9月、満州国のハルビンに移り住み、満州鉄道の系列

がいしゃ こくさいうん ゆ つと てつどう はこ にもつ くるま つ か はこ し ごと
会社の国際運輸に勤めた。鉄道で運ばれてきた荷物を 車に積み換えて運ぶ仕事だっ
た。じぶん えいぎょうしょ かん り ちゅうごくじん ちょうせんじん じん うんてんしゅ さはい
自分は営業所で管理をして、中国人・朝鮮人・ロシア人などの運転手の差配を
した。

とう じ まんしゅうこく に ほんじん ちょうせんじん はっけい じん かんみんぞく さまざま みんぞく
当時の満州国は、日本人・朝鮮人・白系ロシア人・漢民族など様々な民族であふ
れていた。まんしゅうこく こうてい ふ ぎ ほうそう ごぞくきょうわ と な かいしや
満州国の皇帝だった溥儀は、ラジオ放送で五族協和を唱えていた。会社で
もちゅうごくご ご こうしゅう とう じ ちょうせん きょうせい にかい ほん ご つか
も中国語やロシア語の講習をしていた。当時朝鮮では強制的に日本語を使わせて
いたので、ちょうせんご こうしゅう たが み ぶ て ぶ かい わ
朝鮮語の講習はなかった。お互いに身振り手振りをしながら会話をしてい
た。

く ら しょうわ おお や はっけい じん き
ハルビンで暮していた1941年(昭和16年)、大家さんだった白系ロシア人で貴
ぞく 族だったウォロン・ゾーウフ氏から油絵をいただいた。その油絵は敗戦前に日本へ送
る ことができたので、いま たいせつ も
今でも大切に持っている。

かつらおか ほっかいどうかみのくにちょうかつらおか しゅっしん けんべい まんしゅうこく き
桂岡(北海道ノ国町桂岡)出身の人が憲兵として満州国に来ていた。

戦争中

しょうわ たいへいようせんそう はじ ころ かんとうぐん しょうしゅう
1941年(昭和16年)、まだ太平洋戦争が始まっていない頃に関東軍に召集さ
れたが、2ヶ月で除隊となった。

しょうわ ごろ としぼうえいしょうしゅう かい め しょうしゅう
1945年(昭和20年)7月20日頃、ハルビンの都市防衛召集で2回目の召集
う かんとうぐん ぶ たい はい かんとうぐん おお そう こ いりよう しょくりよう いりよう
を受けた。関東軍の七八二部隊に入った。関東軍の大きな倉庫で衣料・食糧・医療
などの軍用品をくるま ゆ そう たんどう しゃりよう で い
車で輸送する担当だった。1日に50車両ほども出入りがあった。

敗戦

しょうわ ぎよくおんほうそう き りくぐん しょぞく
1945年(昭和20年)8月15日、玉音放送をハルビンで聞いた。陸軍で所属
していた部隊が集まって聞いていた。雑音もなく、日本が負けたという内容もわかっ
た。なさ くに つ ざんねん おも
「情けない。国のために尽くしたのに残念だ」と思った。

まんしゅうこく ちゅうごくじん へんせい まんぐん ほんこう に ほん
8月16日、満州国において中国人で編成されていた満軍が反抗してきた。日本
ぐん こうせん ひ い
軍と交戦していたが、2、3日ほどで引いて行った。

まんぐん ひ あと ふかしんじょうやく やぶ れんぐん しんこう じぶん
満軍が引いた後、不可侵条約を破ってソ連軍が進攻してきた。自分たちはハルビン
ぶ そうかいじょ ご ぼたんこう ある い せんろ うえ
で武装解除をした。その後、ハルビンから牡丹江まで歩いて行った。線路の上を4日
間ほど歩き通しだった。ある とお くさ ね
草むらで寝た。

とちゅう ぼたんこう お まんもうかいたくだん ちが かれ
途中で牡丹江からハルビンへと向かう満蒙開拓団とすれ違った。彼らはハルビンへ

と向かっていった。みんな着の身着のままだった。子供たちもおおぜい。この子供たちの中から残留孤児が生まれた

牡丹江に日本兵が大量集められた。ここに20日間ぐらいいたと思う。日本軍の兵舎で生活していた。

自分の妻と2人の子供はハルビンに残された。

■ 抑留

1945年（昭和20年）の9月末から10月初め、ソ連軍は牡丹江にいた日本兵たちへ「ダモイ（日本へ帰す）」と言って、無蓋（屋根がないこと）の貨車に乗せた。

日本に帰るにはウラジオストクの方向に列車が進まなければならないが、列車は反対方向のシベリアに向かっていた。途中で黒竜江（アムール川）を渡ったので「だまされた」と思った。

1週間ほど列車に乗って、サガラドッグ（場所不明）という場所に着いた。1,000人ほどの日本兵がいた。冬を迎えて、シラカバやマツの薪取りをさせられた。雪は少ないがとても寒かった。凍傷になり手の指が曲がってしまった。



凍傷で関節が曲がってしまった井川さんの手の指

サガラドッグの収容所では300人ぐらいの日本兵が死亡した。ほとんどが栄養

失調^{しつちょう}だった。寝床^{ねどこ}でパンを握^{にぎ}ったまま死^しんでいる人^{ひと}もいた。遺骸^{いがい}の埋葬^{まいそう}は日本兵^{にほんへい}がしたが、土^{つち}が凍^{こお}っているので小^{ちい}さな穴^{あな}しか掘^ほることができなかつた。遺骸^{いがい}はすぐ凍^{こお}るので、手^て足^{あし}を少しだけ叩^{すこ}くと簡単^{かんたん}に折^おれた。小^{ちい}さな穴^{あな}に身体^{からだ}・手^て・足^{あし}などをまとめて埋葬^{まいそう}した。おそらく今^{いま}でもシベリア^ちの地^なに仲間^{なかま}の遺骨^{いこつ}が眠^{ねむ}っているだろう。

収容所^{しゅうようじょ}の中^{なか}はペチカ式^{しき}の暖房^{だんぼう}だったので、かなり暖^{あた}かかった。火^ひが絶^たえないようにひとり^ふりが不寝番^{ふしんばん}をしていた。1棟^{むね}に50人^{せい}ぐらいが生活^{せいかつ}していた。木製^{もくせい}の2段^{だん}ベットがあった。しかし、トイレ^{おくがい}が屋外^{さむ}にあり、かなり寒^{さむ}かった。

収容所^{しゅうようじょ}での食^{しょく}事は、黒^{くろ}パンが1日^{かい}2回^{かい}で1回^{かい}に350g^{しお}ずつ、タラやニシンを塩^{しお}で煮^にたスープが1日^{かい}3回^{かい}だった。収容所^{しゅうようじょ}内^{ない}で食^たべる時^{とき}には、飯盒^{はんごう}に食^{しょく}事をもらって生^{せい}活^{かつ}している棟^{むね}で食^たべた。

シラミ^でが出るので、夜^{よる}になると身体^{からだ}がかゆくなつた。軍服^{ぐんぷく}を蒸気^{じょうき}で蒸^むしてシラミを殺^{ころ}した。

1947年^{しょうわ}（昭和22年）になって、抑留^{よくりゅう}されている日本兵^{にほんへい}のなかで反官闘争^{はんかんとうそう}が起こつた。これは、同じく抑留^{よくりゅう}されている人間^{にんげん}なのに少尉^{しょうい}などの人^{ひと}たちは労働^{ろうどう}をしていなかった^たので、他^たの日本兵^{にほんへい}の不満^{ふまん}が高^{たか}まったこと^{げんいん}に原因^{げんいん}があつた。反官闘争^{はんかんとうそう}の後^{あと}、少尉^{しょうい}なども労働^{ろうどう}をするようになった。

収容所^{しゅうようじょ}では共産主義^{きょうさんしゆぎ}の思想教育^{しそうきょういく}を受^うけた。まず、予科練^{よかれん}などを出^でた17、18歳^{さい}ぐらいの若者^{わかもの}たちが教育^{きょういく}を受^うけ、自分^{じぶん}たちはその若者^{わかもの}たちから教育^{きょういく}を受^うけた。若者^{わかもの}たちは、天皇制批判^{てんのうせいひはん}などを強^{きょう}要^{よう}し、それ^{たい}に対して意見^{いけん}を言^いうと反動分子^{はんどうぶんし}として処罰^{しょばつ}を受^うけた。重労働^{じゅうろうどう}を強^しいられる収容所^{しゅうようじょ}に移^{うつ}される罰^{ばつ}もあつた。日本^{にほん}でも共産主義^{きょうさんしゆぎ}を伝^{つた}えていかなければ日本^{にほん}に帰^{かえ}さないと言^いわれた。するつもりはなかつたが、帰^{かえ}してくれないので「する」と言^いつた。

自分^{じぶん}がシベリア^{よくりゅう}に抑留^{よくりゅう}されていることは、シベリア^{いっしょ}で一緒^{よくりゅうせい}に抑留生活^{せい}をし、いち早く^{はや}帰国^{きこく}した仲間^{なかま}に頼^{たの}んで、郷里^{きょうり}に知^しらせてもらっていた。

1949年^{しょうわ}（昭和24年）、ナホトカ^{しゅうようじょ}の収容所^{れんぐん}でソ連軍^{にほん}から「ダモイ^{かえ}（日本へ帰す）」と言^いわれた。6月末^{まつ}にナホトカ港^{こう}を出港^{しゅつこう}し、7月3日^{まいづるこう}に舞鶴港^{きょうとふまいづるし}（京都府舞鶴市）に復^{ふく}員^{いん}した。胸^{むね}がいっぱいになった。舞鶴^{まいづる}では検閲^{けんえつ}などを受^うけて3日^すほど過^{にほんかい}ごし、日本海^{はこだて}周^つりの鉄道^{はこだて}に乗^{まわ}って青森^{てつどう}まで行^いつた。青森^{あおもり}からは連絡線^{れんらくせん}に乗^のって函館^{はこだて}に着^ついた。函館^{はこだて}

からは鉄道で江差に帰って来た。江差駅には親類などが迎えに来てくれていた。帰ってきた時には親類などがお祝いを開いてくれた。

戦後

復員後は日本通運で働いた。今の佐々木病院がある場所にヤマニジュウ関川家の蔵があったが、そこは食糧庁の指定倉庫となっていた。その蔵には、北海道をはじめ青森や秋田などからの農家の供出米が納められていた。ヤマニジュウ関川家の蔵だけでは足りないので、オオガネキ高橋家の蔵も使っていた。この倉庫から函館米穀へと受け渡し、配給米となった。ネズミが米を食べないように、防毒面をかぶって燻蒸をした。



地図：OpenStreetMap（オープンストリートマップ）より

たかの せんそうたいけん 高野コマさんの戦争体験

■お名前

たかの
高野コマさん

■生まれた年

1911年（明治44年）

■終戦時の年齢

まん
満33歳

■聞き取り年月日

2005年（平成17年）9月15日

■戦時中・終戦時・戦後にいた場所

せんじちゅう からふと
戦時中 樺太（サハリン）

しゅうせんじ からふと
終戦時 樺太（サハリン）

せん ご からふと えさし
戦 後 樺太（サハリン）→江差

■戦争が始まる前

りしり ほっかいどう りしりとう じんじょうしょうがっこう かよ あね こども せ お がっこう い
利尻（北海道の利尻島）の尋常小学校に通った。姉の子供を背負って学校に行っ
た。2、3個のおにぎりを持って行き、子供が泣けば少しずつ食べさせていた。その
おにぎりが無くなれば子供が泣き出すので、先生に「廊下に行ってなさい」と言われ
た。

りしり じんじょうしょうがっこう で りしり こうじょう はたら ご
利尻の尋常小学校を出ると、利尻のカニ工場で働いた。その後、17、18歳
ごろ からふと こうじょう はたら い まいとし ごろ りしり しゅっぱつ
頃には樺太（サハリン）のカニ工場まで働きに行った。毎年4月頃に利尻を出発し
て樺太に行き、11月ごろに樺太から利尻に戻った。海が時化て大変だった。

だいじ ころ からふと ひしとり わ が し や いと あね たよ からふと ていじゅう
20代初めの頃、樺太の菱取で和菓子屋を営んでいた姉を頼って樺太に定住した。
その後、1935年（昭和10年）頃結婚した。夫は菱取の魚菜市場で働いていた。

せんそう はじ からふと せいかつ しあわ
戦争が始まるまでの樺太での生活は、とても幸せだった。

■戦後の抑留

1945年（昭和20年）8月30日、ソ連軍がやってくるということで菱取から落

あひ 合（ドリンスク）まで歩いて行った。出 発する時に菱取の町に火を放った。

ひる ま ある れんぐん み 昼間に歩くとソ連軍に見つかるので、昼間は木陰で寝て、夜に歩いた。子供4人を連れて行くのは辛かった。夜に歩いていると当時6歳だった子供が眠たがったが、夫が怒って歩かせた。

おな となりぐみ ひと なか おお ひと ははおや じぶん あか かわ な 同じ隣組の人にはお腹が大きい人もいた。母親が自分の赤ちゃんを川に投げている光景も見た。死体は見えなかったが、腐っている臭いが漂っていた。

とちゅう れんぐん しゅうよう おちあい む おちあい がっこう こうしゃ ね 途中でソ連軍に収容されて落合に向かった。落合では1ヶ月ほど学校の校舎に寝起きした。寝床は板張りの3段ベッドだったが、小さい子供がいるので一番下を使っていた。上の段で寝ている子供たちがオネショをすると、そのオシッコが下の段にまで垂れてきた。1ヶ月ほどして、落合から菱取に戻ったが、火を放っていたので住居がなかった。大きな病院に寝起きしていた。

れん はたら もの た い みんかんじん せいじんだんせい はたら ソ連からは「働かない者は食べるな」と言われ、民間人でも成人男性は働かされた。夫は港で人夫の仕事をさせられた。倉庫で大豆などの食料品が盗まれないように番をしていた。女性や子供は働かされることはなかったが、夫ひとり分の収入で家族5人分の生活をしなければならなかったので、子供たちは朝早くに港でエビを釣り、茹でてバザーで売っていた。

わたし にほんじん のう か ほ てつだ い 私 も日本人の農家のところへ10日間ほどイモ掘りの手伝いに行ったことがある。帰りは馬車で送ってもらい、イモも貰ってきた。

しょくじ だいず はいきゅう だし だいず こめ ま 食事は大豆が配給された。コンブ出汁に大豆と米を混ぜておかゆにした。

みんかん にほんじんにょせい なか れんぐん へい し ぼうこう にんしん ひと 民間の日本人女性の中には、ソ連軍の兵士に暴行されて妊娠させられた人もいた。

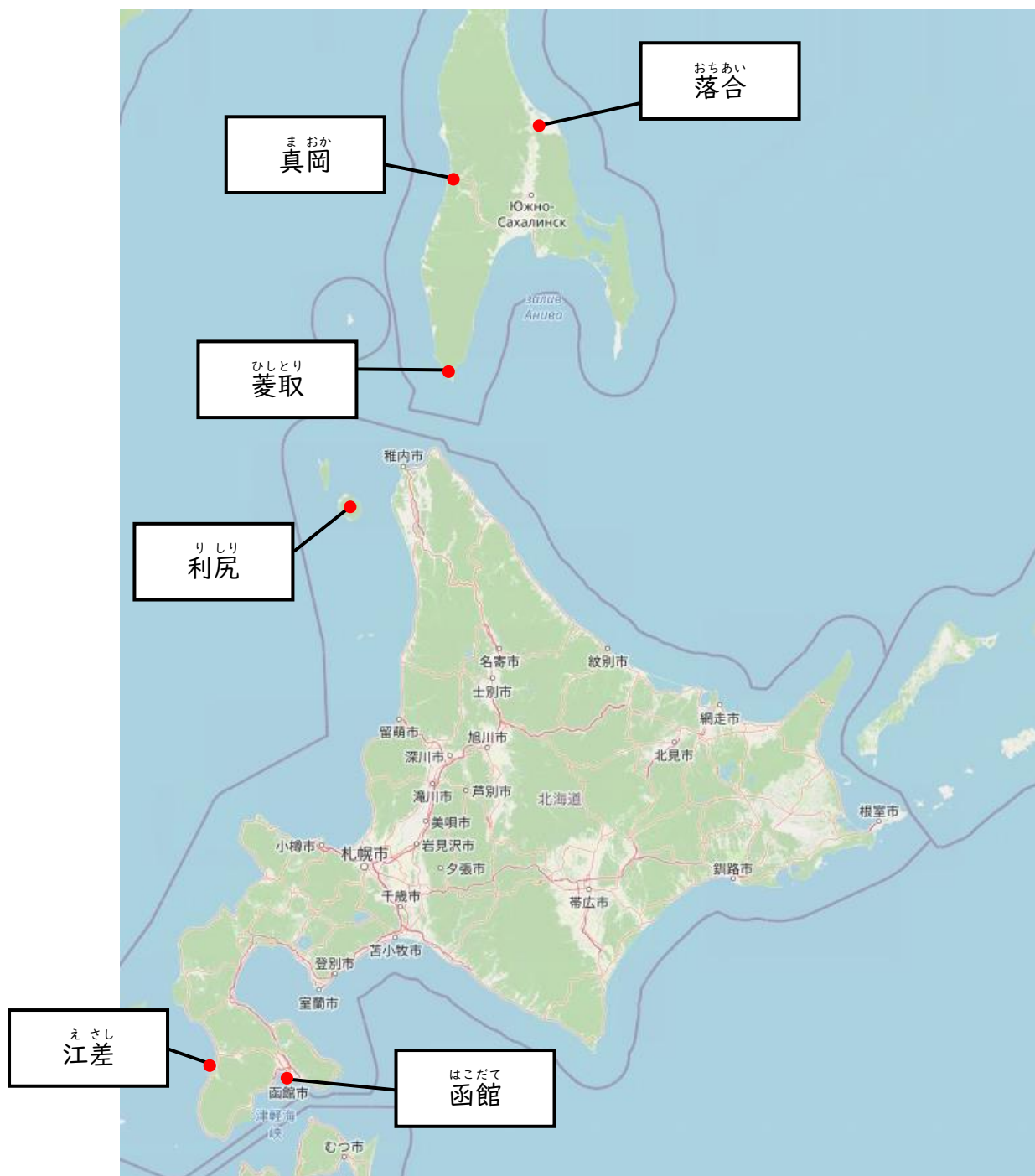
■ 帰国

1949年（昭和24年）、ソ連軍から民間人を全員帰国させると聞かされた。必要書類に不備がある人や、生活態度の悪い人は帰さないと言われた。いざ、船に乗り込むという時にパスポートを無くしてしまった人がいた。その人は、便所の肥溜めの中までも手でかきまわしていた。あの人はどうなったのだろうか？

ひしとり の こ ふね れん ぎよせん ま おか にほん ひきあげせん 菱取で乗り込んだ船はソ連の漁船だったが、真岡（ホルムスク）で日本の引揚船に乗り換えた。私の夫は、真岡に上陸したときにタバコを吸っているところを見つけた。タバコは禁止だったが許してもらった。

ひきあげせん おや ひと おやもと かえ
引揚船は「親がいる人は親元に返す」ということで、夫の親がいる江差に向かうた
めにはこだてこう つ まおか はこだて
めに函館港に着いた。真岡から函館まで2日ほどだった。えさし とうちやく うばがみだい
神宮のお祭りが終わった頃だった。

えさし く はじ おとこ ひと いっしょ やましごと とどがわ ば ば やま
江差で暮らし始めてからは、男の人と一緒に山仕事もこなした。椴川や馬場山などに
いき まる た たにま お さぎょう ひるやす やす いえ つか たき ぎ ひろ
行き、丸太を谷間へ落とす作業をした。昼休みでも休まず、家で使う焚き木拾いをし
た。



地図：OpenStreetMap（オープンストリートマップ）より

赤石富貴さんの戦争体験

■お名前

赤石富貴 さん

■生まれた年

1921年（大正10年）

■終戦時の年齢

満24歳

■聞き取り年月日

2005年（平成17年）9月11日

■戦時中・終戦時・戦後にいた場所

戦時中 余市

終戦時 余市

戦 後 余市→江差

■戦争が始まる前

1934年（昭和9年）に余市（北海道余市町）の実科女学校に入 学して4年間通った。実科女学校では主に和裁・お茶・花などを習った。

実科女学校4年生の7月頃に修学旅行へ行だったが、その頃に日中戦争が始まった。

修学旅行中に友人と「戦争が始まったわね」と話していたことを覚えている。

修学旅行は京都・大阪・伊勢・東京を回ったが、移動は鉄道か船を使った。汽車の中で一泊することもあった。東京での自由時間では、大学に通っていた兄（三男）と会った。兄の友人にモロゾフの社長の息子がいたので、家の形をしたチョコレートを食べさせてもらった。その後、洋食も食べさせてもらい、ブラウスを買ってもらった。

■戦争の始まり

1941年（昭和16年）12月8日は札幌に出掛けていた。太平洋戦争が始まったと聞いた時は「大戦争になって負けるんじゃないか」と思ったが、そんなことは億

び だ
尾にも出せなかった。

たいへいようせんそう はじ じたく き
太平洋戦争が始まるまで、自宅ではアメリカのレコードを聞いていたが、もう聞く
ことができなくなった。また、よ いち
余市にあったニッカウヰスキーの社長婦人はイギリス
ひと
の人だったが、たいへいようせんそう はじ がいしゅつ とき ぼう し まぶか かお
の人は、太平洋戦争が始まってからは外出する時に帽子を目深にかぶって顔
かく
を隠しているのを見て、かわいそうだとおも
思った。

せんそうちゅう ■ 戦争中

しゅっせい あに さんなん くんれんちゅう せんしゃ け が せんじちゅう じっ か
出征していた兄（三男）が訓練中に戦車とぶつかって怪我をして、戦時中に実家
もど
へ戻ってきた。しゅうい ひと じぶん かえ き
周囲からは「あのひと、自分だけ帰って来たんだって」というような陰
ぐち い
口を言われていたので、あに さんなん いや おも
兄（三男）は嫌な思いをしていた。

しやうわ あに じ なん かい め しょうしゅう う しゅっせい ともだち
1941年（昭和16年）、兄（次男）が2回目の召集を受けて出征した。友達
しんせき よ そうこうかい よ いちえき り やく みち はた も み おく
や親戚を呼んで壮行会をした。余市駅まで1里（約4km）の道を旗を持って見送った。
あに じ なん たいへいようせんそう はじ ほうめん
兄（次男）は太平洋戦争が始まるとニューギニア方面にいたようだ。

たいへいようせんそう はじ まいにち そうこうかい
太平洋戦争が始まると毎日のように壮行会があった。しかし、しだいにぶっ し ふ そく
してきてお酒が手に入らなくなってきた。

しゅっせい ひと せんになはり はり め とらどし
出征する人には千人針をしてあげた。ひとりに1針ずつ縫ってもらうが、寅年の
おんな ひと ひと とし かず め
女の人はその人の年の数だけ縫ってもらうことができたので、ねんばい とらどし ひと さが
して縫ってもらった。まち た い か ひと め
街に立って行き交う人たちに縫ってもらうこともした。

よ いち ち しま どうほうめん しゅっぱつち すいさんしけんじやう ほん ぶ
余市は千島・アツツ島方面への出発地となっていて、水産試験場がその本部となっ
ていた。じっ か よ へ や しょうこう しゅくしゃ ていきやう じぶん じやちゅうべや
実家では良い部屋を将校たちの宿舎として提供し、自分たちは女中部屋で
しんしよく
寝食していた。しやうわ
1941年（昭和16年）から1945年（昭和20年）まで、すく
いとき とき おお とき しょうこう
時で2人、多い時で4人ほどの将校がいた。

しやうわ はじ ごろ ひる じ よる じ
1944年（昭和19年）の初め頃には、昼12時と夜12時にB29がやってき
くしゅうけいほう だ じ たくしき ち なか がま あな ほ
て、空襲警報が出された。自宅敷地の中にニシン釜ぐらいの穴を掘っていて、そこを
ぼうくうごう あな くさ か
防空壕としていた。穴には草を掛けていた。

しやうわ じやうごろ まいにち き
1945年（昭和20年）の6月から7月頃には、毎日のようにB29がやって来
よ いち きじゅうそうしゃ よる しょうめいだん お
た。余市でも機銃掃射があった。また、夜には照明弾のようなものを落としていた。
よ いち ふね み おも
これは余市の船を見ているのではないかと思った。

べいぐん き く となりぐみ くみちやう つか さけ おし
米軍機がやって来ると、隣組の組長さんがメガホンを使って叫んで教えてくれた。

サイレンも鳴っていた。隣組は12、13軒ほどで組織されていた。朝、広場で竹槍の訓練をしていたが、隣組の各家からひとりずつ出さなければならなかった。

余市には朝鮮の人たちや台湾の人たちも多くいた。ほとんどが兵補として働いていた。台湾の人たちは日本人と同じ扱いだったが、朝鮮の人たちは差別されていた。私は「なぜ同じ人間なのに差別をするんだろう」と思い、収穫したリンゴなどを朝鮮の人たちにあげていた。

戦時中、実家では農業と漁業をしていた。農業はリンゴ・ナシ・ブドウ・クリなどの果樹を栽培していた。収穫した果樹は組合に出荷した。漁業は鰺魚をしていた。多い時には9カ統ほどの建網をして、150人から200人ほどを雇っていたが、戦争中には1カ統しか建てなかった。八戸（青森県八戸市）からヤン衆を呼んでいたが、戦時中は年寄りが多かった。

1944年（昭和19年）頃に、実家にいた将校が「来年の8月頃には戦況も危うくなってくる。お互いに元気でいよう」といって、北千島へと出発していった。

1945年（昭和20）の2月から3月頃には、余市にやって来る兵隊たちが物資不足なのか銃などを持っておらず、戦争に負けるような気がし始めた。

若い未婚女性は、勤めないでいると挺身隊に入れられて東京や千葉へと連れて行かれた。それが嫌なのでみんな勤め先を探した。自分も水産試験場に勤めたり農業をしたりした

余市では女子青年団に入っていた。農家から野菜を少しずつ分けてもらって、兵隊にあげていた。また、慰問も行った。当時流行っていた李香蘭の歌や「九段の母」などの劇を披露した。月寒の陸軍病院へ慰問に行ったこともあった。いっぱいお土産を持って行ったが、帰りにはアンパンや乾パンをもらって帰ってきた。申し訳なかった。

女性の団体として愛国婦人会があった。愛国婦人会には女子青年団よりも年長者が入っていた。出征兵士の見送りや、将校たちの歓迎会をしていた。

ある時、酒席に愛国婦人会の人たちが呼ばれ、私も友人たちと個人的に誘われた。その席で、私が尊敬していた愛国婦人会の人が将校の膝の上に座っていた。それを見てとてもがっかりした。私も将校に「膝の上に座れ」と言われたが、「私は芸者や女給じゃありません！」と言って帰った。

1945年（昭和20年）8月15日は余市の自宅にいた。「重大放送がある」というので家族でラジオを聞いていた。雑音がひどく、何を言っているのかわからなかったが、何となく「これで戦争が終わったのかなあ」と思った。後で将校から戦争が終わったと聞いた。

余市では、兵隊が上官を撃ち殺す事件もあった。みんな、戦時中の鬱憤を晴らしたのだろうと言っていた。

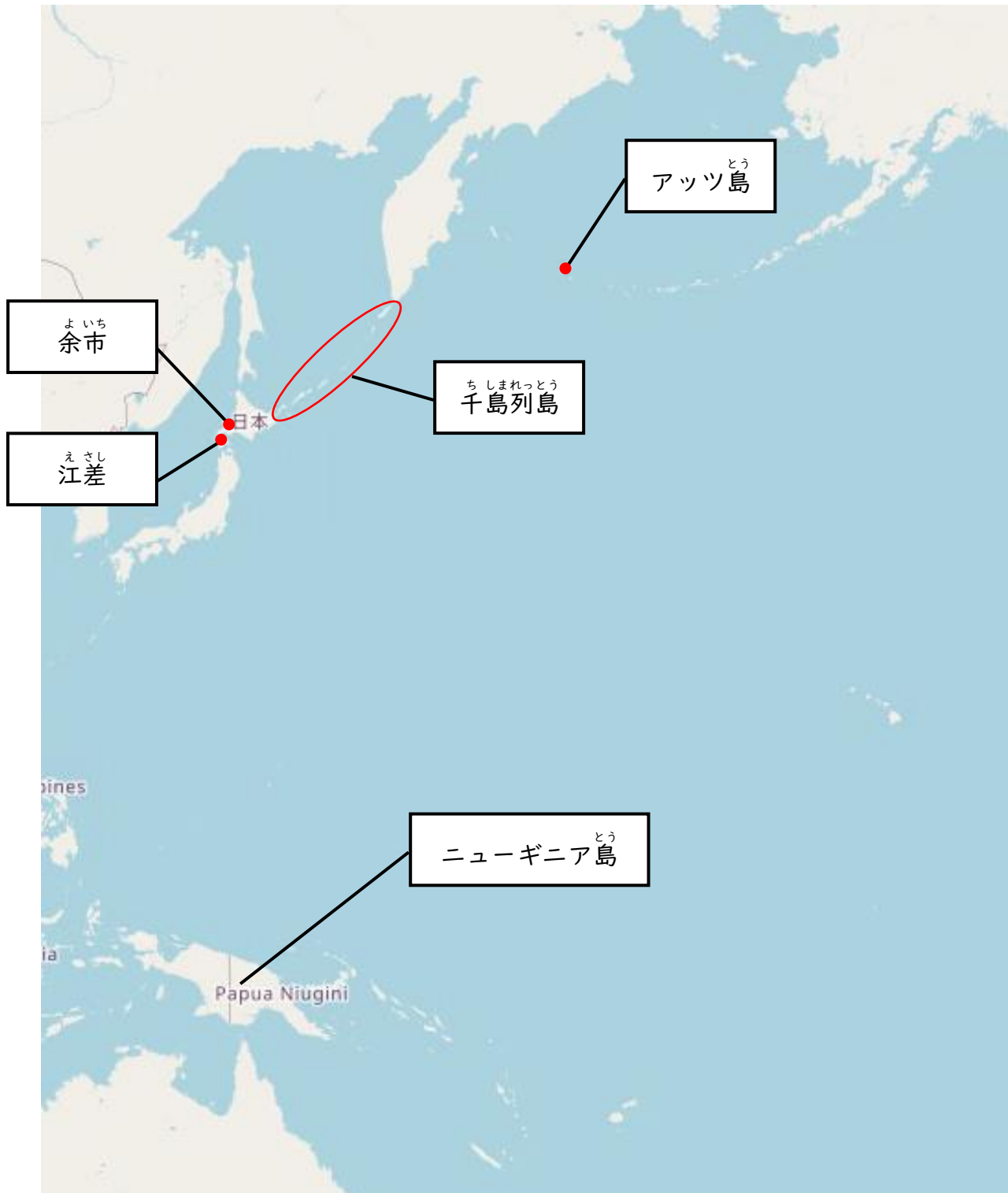
南方に進軍していた兄（次男）の消息は不明だった。1947年（昭和22年）になって舞鶴（京都府舞鶴市）から連絡が入り、生きてることがわかった。余市に帰ってきた兄（次男）は弱々しかった。話を聞くと、ニューギニアでマラリアに罹ったということだった。ニューギニアではニワトリの飼育を担当していたそうだ。だから食料がない時にはニワトリの餌を食べていたということだ。

戦後は、朝鮮の人たちがこれまで差別されていた鬱憤を晴らすような行動をした。汽車の座席などに荷物を置いて、日本人が座れないようにしていた。しかし、自分の顔を見ると、荷物を持ってくれたり、席を空けたりしてくれた。これは、戦時中に朝鮮の人たちを手助けしていたからかもしれない。

1947年（昭和22年）、結婚して江差にやって来た。食料は余市にいた時のほうが良かった。イモの塩煮やイモの入ったおかゆが主食だった。朝におかゆ、昼にイモ、夜におかゆという日が続いた。イモだけを食べる時にはひとり10個ほどが当たった。おかゆは生米とイモを塩味で煮た。嫁いだ家では当時イカ針の工場を営んでいたの、多い時で16人分の食事を作らなければならなかった。1日中イモの皮むきをしていた。イモの塩煮と一緒に食べるためにスルメの塩辛を作った。大根の漬物も漬けたが、漬物をいっぱい食べないで済むように、わざとしょっぱくした。

その他には、ホッケの糠漬けの三平汁などを食べた。あまり生魚を食べた記憶がない。山に入ってアザミを採り、かるくあぶって毛を焼いて茹でてから食べた。戦後は愛宕町（江差町字愛宕町）の海岸に勝手にイワシがあがることがあった。みんなで獲って三平汁にした。

当時住んでいた愛宕町から緑丘（江差町字緑丘）まで、イモ・ニンジン・マメなどを作りに通った。イモは冬になると穴を掘って貯蔵していた。カボチャは軒下に保存した。長ネギはカサカサになるまで吊るして干した。1950年（昭和25年）前後までそのような食事だった。



地図：OpenStreetMap（オープンストリートマップ）より

たかはしひろし せんそうたいけん 高橋 広 さんの戦争体験

■お名前

たかはしひろし
高橋 広 さん

■生まれた年

1921年（大正10年）

■終戦時の年齢

まん 24 さい
満24歳

■聞き取り年月日

2005年（平成17年）9月11日

■戦時中・終戦時・戦後にいた場所

せんじちゅう とうきょう ちしまれっとう
戦時中 東京→千島列島

しゅうせんじ ちしまれっとう ほろむしろとう
終戦時 千島列島の幌筵島（パラムシル島）

せん ご ちしまれっとう
戦 後 千島列島→シベリア

■戦争が始まる前

14歳で東京へ奉公に出て、婦人服や子供服を販売していた。

1937年（昭和12年）に日中戦争が始まった時は16歳だった。その時は「戦争をやっているんだなあ」というぐらいにしか思わなかった。

しかし、1941年（昭和16年）に太平洋戦争が始まった時は20歳になっていて、「あのアメリカと戦争をするなんて大変だ。とんでもない戦争になった」と思った。

■戦時中

1942年（昭和17年）7月、東京で赤紙をもらった。覚悟はしていたが「遂に来たか」という感じだった。それまでの教育で、国に尽くすことはあたりまえだと考えるようになっていたので、「いっちょうやってやるか」という心境だった。

札幌に入隊した。同じ年の10月に千島列島の幌筵島（パラムシル島）へ行き、4、5日後に占守島（シュムシュ島）へと向かった。北千島の警備隊は第91師団で約30,000人ほどがいた。

初めは警備兵としてアッツ島へと向かう予定だったが編成変えとなり、120人ほどが幌筵島に残留することとなった。自分も残留部隊に編成された。

1943年（昭和18年）1月、通信の教育を受けるため、占守島から第91師団本部がある幌筵島の柏原（セベロクリリスク）へと向かった。柏原は漁業基地でもあり、民間人も多くいた。ここでは手旗信号やモールス信号の教育を受けた。朝起きるとすぐに手旗信号の解読訓練をした。解読できなければご飯を食べることができなかった。

1943年（昭和18年）3月、不利が伝えられていたアッツ島へと合流することとなり、海軍の第五艦隊に護衛されながら、浅香丸という武装巡洋艦でアッツ島へ向かった。武装巡洋艦はほかに2艘あった。しかし、海軍の第五艦隊がアッツ島付近で米軍と遭遇して海戦になった。時刻は夕方だったが、砲弾が飛び交い水柱があがっていた。戦闘の様子を見ようと思って甲板に出たら、海軍の連中に「邪魔だ」と怒られた。その後、アラスカから米軍機が発進したとの連絡があり、アッツ島上陸は不可能との判断から、3艘の輸送船は幌筵島に引き返した。その後も第五艦隊は米軍との交戦が続いた。

アッツ島は1943年（昭和18年）5月に約2,600人が玉砕しており、もしアッツ島に上陸していたら自分も死んでいただろう。

その後、南方戦線へ兵力が引き抜かれ、30,000人ほどいた警備隊は15,000人ほどとなった。

■敗戦

1945年（昭和20年）8月15日は、北千島の幌筵島の師団司令部にいた。司令部を警備するため、ほとんどの兵士が師団司令部に集められていた。中隊全員で玉音放送を聞いた。本土から距離があるので雑音がひどかったが、これで戦争が終わるんだという気配を感じた。

その後に中隊全員に向けて話があり、敗戦したということを知った。「命令に従って自重せよ」ということだった。

これで物資不足や辛い仕事から解放され、故郷に帰れるんだと思った。感激した。戦争が終わったということなので、残っている物資を処分してしまえということに

なり、ボタモチなどを作^{つく}ってみんなで食^たべた。武器・弾^{ぶき}薬^{だんやく}なども土^{つち}の中^{なか}に埋^うめてしまおうという声^{こえ}もあったが、まだ捨^すてないでいた。後^{あと}にして思^{おも}えば、このとき弾^{だんやく}薬^{やく}などを捨^すてていたら大^{たい}変^{へん}だった。

8月18日の夜、自分^{よる}は幌^{じぶん}筵^{ほろむしろとう}島^{ふしんばん}で不^ふ寝^{しん}番^{ばん}をしていた。すると、北^{きた}の海^{かい}上^{じょう}にみえる占^{しゅむしゅとう}守^{こくたんざき}島^{ふきん}の国^{ひかり}端^{なん}崎^{おも}付^{おも}近^{でんわ}に光^{こくせき}がみえた。何^{なん}だろ^{なん}うと思^{おも}っていると、電話^{でんわ}で「国^{こく}籍^{せき}不^ふ明^{めい}の艦^{かんせん}船^{しゅむしゅとう}が占^{じょうりく}守^{れんらく}島^{はい}に上^{あと}陸^{あと}した」という連^{れんぐん}絡^{こうげき}が入^{はい}った。後^{あと}でわかつたことだが、これはソ連^{れんぐん}軍^{こうげき}の攻^{こう}撃^{げき}だった。

すでに敗^{はい}戦^{せん}したということが伝^{つた}わっていたのだが、司^し令^{れい}部^ぶから「自^じ衛^{えい}のた^ため^めの戦^{せん}闘^{とう}は許^{きょ}可^かする」という連^{れんらく}絡^{はい}が入^{はい}ったので、幌^{ほろむしろとう}筵^{しゅむしゅとう}島^{わた}から占^{こうせん}守^{せん}島^{せん}へ渡^{わた}り、交^{こう}戦^{せん}するこ^こととな^なった。

それから装^{そう}備^びを整^{ととの}えて、朝^{あさ}の6時^{しゅつぱつ}に出^{へい}発^しした。兵^{だんやく}士^{ぱつ}ひ^{ぱつ}と^{ぱつ}り^{ぱつ}につ^{ぱつ}き^{ぱつ}弾^{ぱつ}薬^{ぱつ}240発^{ぱつ}と手^{しゅりゅうだん}榴^{はつ}弾^{はつ}2発^{はつ}など^{はつ}を装^{そう}備^びして、幌^{ほろむしろかいきょう}筵^{わた}海^{ひるごろ}峡^{しゅむしゅとう}を渡^{じょうりく}り、昼^{じぶん}頃^{じぶん}に占^{しゅむしゅとう}守^{じぶん}島^{じぶん}へ上^{じぶん}陸^{じぶん}した。自分^{じぶん}の部^ぶ隊^{たい}は占^{しゅむしゅとう}守^{じゅうだん}島^{じゅうだん}を縦^{しゅむしゅかいどう}断^{ほくじょう}する占^ご守^ご街^ご道^ごを北^ご上^ごし、午^ご後^ごの3時^ご頃^ごに戦^{せん}闘^{せん}地^{せん}域^{せん}に到^ち達^{いき}した。日^{どう}本^{たつ}軍^{たつ}は戦^に車^{ほんぐん}11連^{せん}隊^{せん}が活^{れんたい}躍^{かつやく}した。戦^{せん}車^{せん}隊^{しやたい}の連^{れんたい}隊^{ちよう}長^{じようはん}は上^{せん}半^{せん}身^{しん}裸^{はだか}になり戦^{せん}車^{しや}の天^{てん}蓋^{がい}から身^みを出^だし、軍^{ぐん}刀^{とう}を振^ふりかざして指^し揮^きを執^とっていた。しかし、つい^{れんたいちよう}に連^{じゅうだん}隊^{だん}長^{だん}も銃^{じゅうだん}弾^{だん}に倒^{たお}れた。

そんななか、「16時^{ていせん}をも^{めい}って停^{さつぱろ}戦^{ほくぶ}せよ」との命^{めい}令^{れい}が札^{さつぱろ}幌^{ほくぶ}の北^{ほくぶ}部^{ほう}方^{ほう}面^{めん}軍^{ぐん}からあり、川^{かわ}を挟^{はさ}んでソ連^{れんぐん}軍^{たい}と対^{たい}峙^しするこ^こととな^なった。ソ連^{れんぐん}軍^{かわ}が^{ほくがん}いる川^{かわ}の北^{ほく}岸^{がん}にはハ^おン^おノ^おキ^おが生^おい茂^おり、身^しを隠^みすの^{かく}に都^つ合^{ごう}が良^よかつた。日^に本^{ほん}兵^{へい}が^{かわ}いる川^{かわ}の南^{なん}岸^{がん}は身^みを隠^{かく}すもの^{かく}がなく、地^ち形^{けい}を利^り用^{りよう}して敵^{てき}の銃^{じゅうげき}撃^{げき}を避^よけた。ソ連^{れんへい}兵^{へい}は自^じ動^{どう}小^{しょう}銃^{じゅう}を装^{そう}備^びして^したが、日^に本^{ほん}兵^{へい}の銃^{じゅう}は1発^{ぱつ}ず^うつしか撃^{れんへい}て^{ひと}なかつた。ソ連^む兵^むは人^{じゅうげき}に向^にけ^{ほんへい}て銃^{はやし}撃^{はやし}してくるが、日^に本^{ほん}兵^{へい}は林^{はやし}の闇^{やみ}に向^むか^{じゅうげき}って銃^{じぶん}撃^{とき}をして^{ぱつ}いた。自分^{ぱつ}もその時^{ぱつ}に40発^{ぱつ}から50発^{ぱつ}銃^{ぱつ}撃^{ぱつ}した。

そんななか、「16時^{そうこうげき}に総^{かい}攻^し撃^しを開始^{めいれい}する」という命^{だい}令^{だい}が第^{しだん}9師^{くだ}団^{くだ}から下^{くだ}された。「停^{てい}戦^{せん}」と「総^{そうこうげき}攻^{べつべつ}撃^{めいれい}」という別^{くだ}々の命^{せん}令^{ちん}が下^{こんらん}されるこ^こととな^なり、戦^{せん}地^ちは混^{こん}乱^{らん}した。し^しかし、実^{じっさい}際^{せん}に戦^お闘^おが起^{こうげき}きて^{ふせ}いるの^{かくじん}だから攻^{さい}撃^{さい}を防^ふがな^ふけ^ふればな^ふら^ふないの^ふで、各^{かく}人^{じん}は再^{さい}武^ぶ装^{そう}をし、各^{かく}人^{じん}で持^もって^{かね}いたお^{しやしん}金^{しん}・写^{つうちよう}真^{しん}・通^{しやうきやく}帳^{やく}など^{しやうきやく}を焼^{しやうきやく}却^{しやうきやく}した。

夜^{よる}の12時^ご頃^{じぶん}、自分^{しょうたい}の^{たい}小^{しゅむしゅとう}隊^{しん}対^{しん}して占^{どうくつ}守^と島^{のこ}の四^{ゆう}嶺^{ゆう}山^{ゆう}の洞^{ゆう}窟^{ゆう}に取^{ゆう}り残^{ゆう}されて^{ゆう}いる友^{ゆう}軍^{ぐん}を救^{きゅう}援^{えん}に行^いけ^{めいれい}という命^{くだ}令^{とき}が下^{とき}った。この時^{けんじゅう}には、み^{そう}ん^びな拳^く銃^{らやみ}の装^く備^{らやみ}をし^くた。暗^く闇^{らやみ}

なかの中を3kmほどすすんだ。途中、日本軍の戦車が燃えているのを見た。戦車の天蓋からからだはんぶんほど出して死んでいる兵士を見た。戦車には少年戦車兵という16歳ぐらいの志願兵もいたが、そのような少年も死んだのだろう。

しれいさん とうくつ つ とうくつ なか せんしやう へいし し へいし 四嶺山の洞窟に着いた。洞窟の中には戦傷をしている兵士や死んでいる兵士がいた。ちゆうたい たいきやく 中隊はすでに退却をしていた。

8月19日の朝になって、停戦について話し合うために軍使と通訳がソ連軍へと向かったが、なかなか帰ってこなかった。この軍使と通訳はソ連軍に狙撃され死んでいた。ふたたび軍使と通訳をソ連軍に遣わし、8月22日に停戦となった

10,000人ほどの日本兵は占守島の中央部にある飛行場に集められた。その飛行場の滑走路は3mから4mぐらいの長さをした枕木のような木材を並べたものだった。そこで武装解除となり、将校は軍刀、兵士は銃や弾丸を渡した。

その日は雨が降っていて、8月といえども寒かった。自分を含めた20人ほどの兵士が焚き木を集めて焚き火をしていた。自分は隣にいた小樽出身の戦友と話しをしており、「日本に帰ることができたら小樽へ遊びに行く」などと話しをしていた。

やがて焚き木がなくなったので、兵士たちの装備品を燃やそうということになり、ソ連軍に渡していなかった防毒マスクを燃やすこととなった。しかし、誰かの防毒マスクに手榴弾が入れてあり、そのまま焚き火にくべてしまったので爆発してしまった。その時、自分はお尻を火に当てていたので、両膝の裏に弾丸片がめり込んでしまった。何が起きたのかわからなかったので、両足から血を流しながらも10mほど逃げた。振り返ってみると、焚き火から黒煙が上がり、みんなが倒れていた。さっきまで話しをしていた小樽出身の戦友は、胸から血を流して死んでいた。この事故で2人が死んだ。

怪我をした兵士は、占守島にあった日本軍の野戦病院へと搬送された。病院といっても洞窟の中にあり、蠟燭で灯りをとっていた。雨が降っていたので足元がドロドロだった。中は怪我人でごったがえしていて、軍医と衛生兵が手当てをしていた。物資が不足していたので、麻酔や薬などはほとんどなかった。怪我をしてもヨードチンキを塗って包帯で止血するだけだった。自分も三角巾で止血の手当てを受けただけだった。今でも両足に弾丸片が残っている。そのような手当てで、死んだらそれで終わ

りだった。

50人ほどの戦死者が洞窟の外に並べられていて、ひとりの日本兵が警備をしていた。ソ連兵から銃撃されて頭の半分ほどがなくなっている戦死者が何人もいた。

自分は1週間ほど洞窟の野戦病院で過ごし、その後に飛行場にできたテント張りの収容所に移った。

その後、占守島で戦場整理をしていた。これは1945年（昭和20年）8月18日から19日にかけての戦場で戦死した兵士を茶毘に付すことだった。

すでに土の中に埋もれている死体もあったので掘り起こした。島に生えているハンノキを伐り、井桁に組んで、その上に死体をのせて燃やした。身元確認もできなかった。物資が不足していたのか、自分たちの部隊は軍票をもらっていなかった。遺骨は一括して埋葬した。

戦場整理を終えて収容所へ帰る途中、歩く地面がブヨブヨしていたのでよく見ると、軍服の襟が見えた。死体だった。襟章を見ると中尉だった。しかし、もはや茶毘に付すこともせず、そのまま帰途についた。やりきれなかった。

■ 抑留

1945年（昭和20年）12月31日、突然ソ連軍から輸送船に乗船せよとの命令があった。物資を残してもしかたがないので、ボタモチなどを作って食べた。また、新しい服や靴下も各人に割り当てられた。米も割り当てられたが、みんな靴下の中に米を詰めた。占守島にあった缶詰工場で作られていた缶詰が野積みになっていたの

で、それも持って行くこととした。
夜中に乗船を始めた。行く先はわからなかったが、ソ連兵は「ダモイ、ダモイ（日本へ帰す、日本へ帰す）」と言っていたので、みんな喜んでいて、1艘の船に500人から600人が乗った。

船は千島列島を南下し、樺太の大泊（コルサコフ）に寄航した、ここで物資の補給をした。船はさらに南下し、焼尻島や天売島が見えてきた。みんな日本に帰ることができると思ったが、次第に天売島が遠くなっていくことに気付いた。シベリアへ連れて行かされるとわかった。がっかりして涙が出た。

1946年（昭和21年）の1月初め、船はナホトカ港に着いた。夜中だった。み

んな^{ふね}船から降ろされて^お港に座らされていた。すると、どこからともなくナホトカの少年^{しょうねん}たちが現れ、こっそりと雑囊^{ざつのう}の紐^{ひも}をほどき、靴下^{くつした}に入れた米^{こめ}を盗^{ぬす}んでいった。追っ払^{お ばら}うのに怒鳴^{ど な}り声^{こえ}をあげた。

厳しい寒^{きび}さの中^{さむ}、ナホトカ港^{なか}を出発^{こう}して雪道^{しゅっぱつ}を夜通^{ゆきみち}し歩^よいた。朝方^{あさ}にご飯^{あさがた}を食^{はん}べることとなったが、水^{みず}がないので雪^{ゆき}を溶^とかしてご飯^{はん}を炊^たいた。ほこりっぽい味^{あじ}がしてまずかったが、お腹^{なか}が空^すいていたので食^たべた。

1日^{ある}歩いて、夜^{よる}にナホトカ駅^{えき}に着^ついた。駅^{えき}からは貨車^{かしゃ}に乗^のった。1両^{りょう}に40人から50人^のが乗^のっていた。食^{しょくじ}事は貨車^{かしゃ}を降^おりてご飯^{はん}を炊^たいた。2、3日^ご後、ウラジオストク駅^{えき}の近^{ちか}くにまで行^いったところで停^{てい}車^{しゃ}し、そこで降^おろされた。そこから1日^{ある}かけて山道^{やまみち}を歩^{ある}き、収容所^{しゅうようじょ}に着^ついた。

ここはウラジオストク第10収容所^{だいしゅうようじょ}で、周囲^{しゅうい}をバラ線^{せん}で囲^{かこ}まれていた。1棟^{むね}に60人^のほどを収容^{しゅうよう}することができる幕舎^{ばくしゃ}が10棟^{むね}ほどあった。自分^{じぶん}たちが到^{とう}着^{ちゃく}した時^{とき}には収容者^{しゅうようしゃ}はいなかったが、前^{まえ}にはドイツ兵^{へい}がいたということだった。

収容所^{しゅうようじょ}では、朝^{あさ}6時^{きしょう}に起床^{きしょう}して、7時^{あさ}に朝^{あさ}ご飯^{はん}を食^たべた。8時^{あさ}にはトラックでウラジオストクの街中^{まちなか}へ行^いって労働^{ろうどう}をし、夕方^{ゆうがた}の6時頃^{ごろ}に収容所^{しゅうようじょ}へ帰^{かえ}って来^きた。

食^{しょくじ}事は、ひとりにつき黒^{くろ}パン^{しゅうよう}約350g^{やく}、小^こさじ1杯^{ばい}の砂糖^{さとう}、スー^あプ^あなどが当^あたった。黒^{くろ}パンは収容^{しゅうよう}されている当番^{とうばん}が切り分^きけたが、大^{おお}きさが違^{ちが}うと不平^{ふへい}が出るので、みんな^めで目^めを光^{ひか}らせていた。スー^{ひつじ}プ^{ほね}といっても、羊^{しお}の骨^{あじつ}を塩^{しお}で味付^{あじつ}けしたようなものが、飯盒^{はんごう}の内蓋^{うちぶた}に1杯^{ばい}だった。

お昼^{ひる}ご飯^{はん}は、エンバク（オーツ麦^{むぎ}）のおかゆとスー^{しゅうようじょ}プ^もを収容所^{しゅうようじょ}から持^もって行^いった。エンバクのおかゆは飯盒^{はんごう}に3分^{はし}の1ほど当^あたったが、箸^{はし}ではすくえないぐらいエンバク^{すく}が少^{すく}なかった。そこで、労働中^{ろうどうちゅう}にこっそりと真鍮片^{しんちゅうへん}を手^てに入れ、3日間^いほどで自分用^{じぶんよう}のスプーン^{つく}を作^{つく}った。

1日^{ある}に巻^まきタバコ^{ほん}2本^あが当^たたった。足^{とき}りない時^{とき}にはソ連兵^{れんへい}と物々交換^{ぶつぶつこうかん}をした。喜^{よろこ}ばれたのは手鏡^{てかがみ}だった。ひげを剃^そるために携^{けいたい}帯^{たい}していたが、ソ連兵^{れんへい}は女性^{じょせい}にプレゼントするらしかった。マホルカという刻^{きざ}みタバコ^{つつ}3包^{こうかん}みと交換^{うでどけい}できた。腕時計^{おお こうかん}だともっと多^{おお}く交換^{こうかん}できた。

労働^{ろうどう}は、これから建設^{けんせつ}する造船工場^{ぞうせんこうじょう}の基^き礎^そ作^{つく}りをした。50cmほど地面^{じめん}に穴^{あな}を掘^ほる

ことから始めたが、凍土なので人力ではかなわず、機械を使って穴を掘った。

別の場所ではアパート建設の労働もした。その後、内壁をコンクリートで塗る左官の仕事をしたが、コンクリートを練るには暖かくしなければならないので、ほかの人よりは恵まれていた。



高橋さんが、シベリア抑留時代に自作したスプーン

収容所内の便所は、大きな穴を掘った地面の上に建てられた建物だった。床を張らずに、約40cm幅の板を約40cmの隙間を空けながら並べた。用を足す時には別々の板の上に足を置いて、お尻が隙間の上にくるようにしてしゃがんだ。

労働から帰ってくると、みんなで便所に駆け込んだ。みんなが用を足している姿を見ながら、自分も用を足した。しかしソ連兵の便所も同じようなものだった。

2ヶ月に1回ほど、ウラジオストクの街に出て公衆浴場に行った。浴場といっても湯船はなく、シャワーだけしかなかった。お湯は出た。

衛生状態が悪かったのでシラミがたくさんいた。シラミを退治するために、みんなの服を週1回集め、ボイラーの蒸気でシラミを殺した。しかし卵は死なないので、しばらくするとまたシラミが出た。

夜はベッドで寝た。2段ベッドだったが、1段に2人で寝たので、ひとつの2段ベッドに4人で寝た。夜は寒くてしかたなかったが、お互いに身体をくっつけあって温まった。

収容されている時、夜に突然胸に痛みを感じた。軍医に相談すると「今晚もつかどうかだ」と言われてびっくりした。注射を打ってもらい様子を見ていたところ、痛みはなくなってきたので安心した。夜が明けてからソ連軍の病院へ連れて行かされた。そこで10日間ぐらい休んでいた。

収容所では多くの日本兵が死んでいった。栄養失調で免疫力がなくなって、他の病気にかかって死んでいく者が多かった。栄養失調になると、皮膚が張れ上がり、お腹だけが大きくふくらむが、全身は痩せていった。死んでいった者たちは、服を着せたまま燃やすこともなく、日本人の手で埋葬した。

1948年（昭和23年）6月、突然軍医に呼び出され、ソ連軍の軍医とともに健康診断を受けた。ソ連軍の軍医は女性だったが素っ裸にされ、特にお尻の肉の張り具合を診られた。

その後、自分ひとりにだけ転属の命令があった。同じベッドで寝ていた戦友が夜に寒い思いをするだろうと、申し訳なかった。

今まで暮した収容所を出て、ウラジオストク駅へと向かった。駅には別の収容所から来ていた日本兵が数人いた。ウラジオストク駅から貨車に乗り、2、3日かけてナホトカ駅に着いた。ナホトカ駅から港に歩いて行くと、日本の輸送船が停泊していた。「これで日本に帰れるのか」と思うと涙が出てきた。収容所では体調の悪い者から復員させることにしたのである。

しかし、その船は夜のうちに自分たちを乗せないで出港してしまった。それから自分たちはナホトカに10日くらい滞在し、赤化教育を受けた。共産主義を宣伝するために日本語で書かれた「日本新聞」という新聞も刊行されていた。教師はソ連人ではなく日本人で、夜になると労働歌などを歌った。教育に反抗する者は日本に帰ることができず、何日間もナホトカに残された。

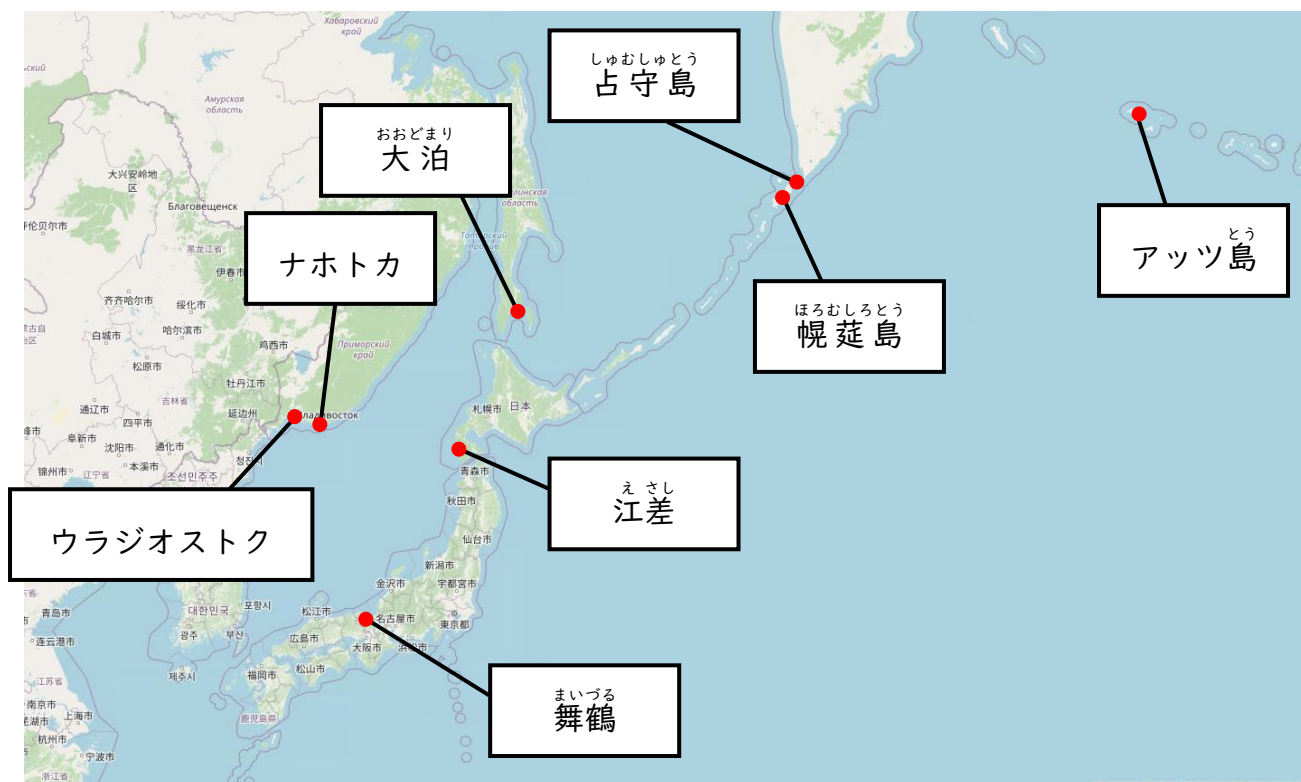
ナホトカでは食事が格段に良くなった。これは太らせてから復員させるという魂胆だと思った。

ついに復員船に乗ることができた。4日間ほどで舞鶴港(京都府舞鶴市)に着いた。
日本の陸地が見えてきたときには感激した。
舞鶴に上陸し、引揚援護局に名前などを申告して、宿泊所で3日間ほど過ごした。
北千島やウラジオストクの収容所で持っていた飯盒があまりにも傷んでいたので、
引揚援護局で新しい飯盒と交換してくれた。舞鶴の観光などもした。毎日風呂にも入ることができた。日本の風呂は最高だと思った。

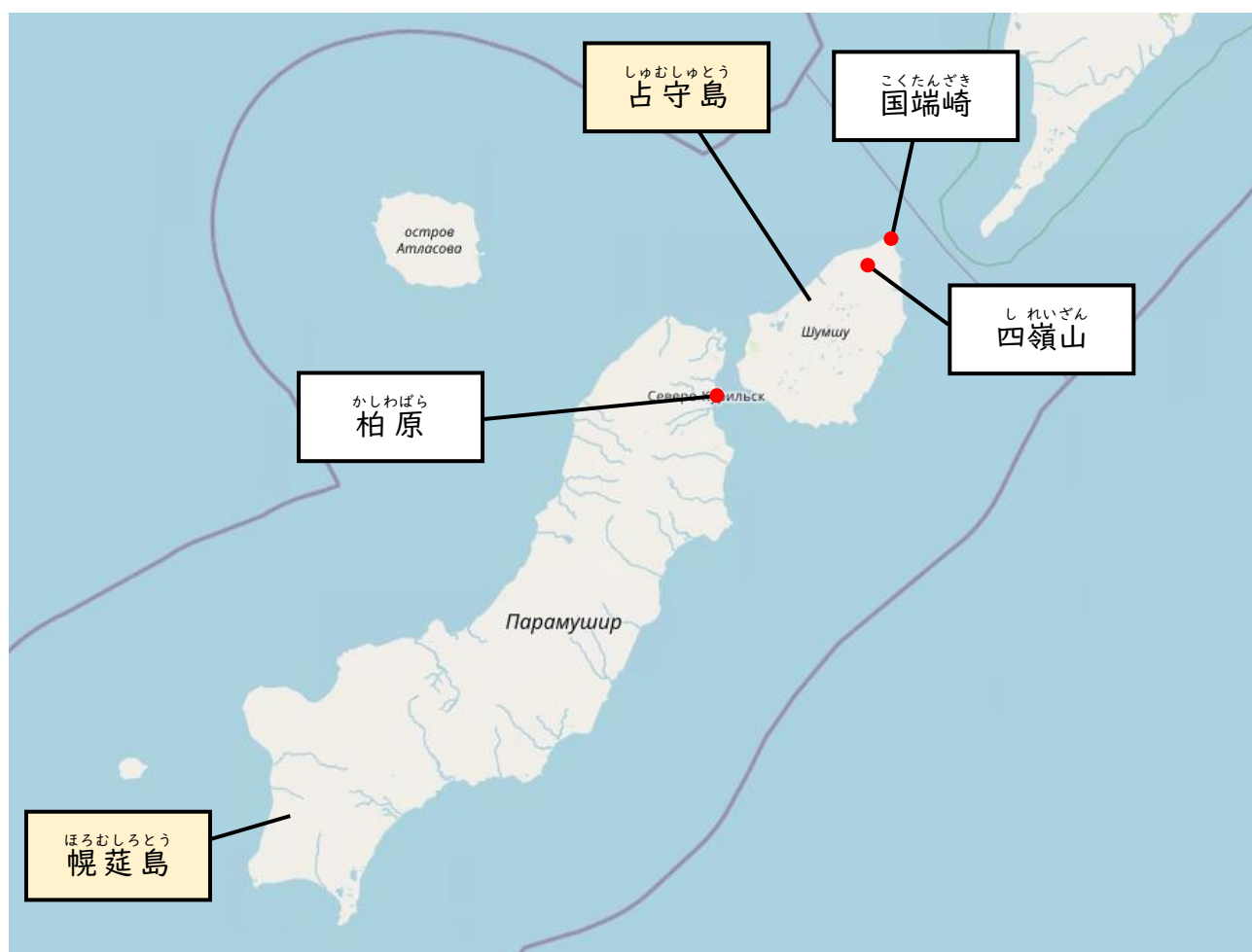


高橋さんが舞鶴(京都府舞鶴市)で交換してもらった飯盒

舞鶴から、名古屋・東京・青森と汽車を乗り継いだ。青森から連絡線に乗って函館に着いた。函館の中島町に引揚援護局があり、そこで300円をもらった。函館から実家に電話連絡を入れて、汽車で江差まで帰った。江差駅まで迎えに来てくれた。
自分の消息が不明だったので、両親は占い師に見てもらっていたそうだ。占いによると、同じく出征していた兄は戻らないが、自分は生きて帰ってくるという話だった。果たしてその通りになった。



地図：OpenStreetMap（オープンストリートマップ）より



地図：OpenStreetMap（オープンストリートマップ）より

岸田富二郎さんの戦争体験

■お名前

岸田富二郎 さん

■生まれた年

1922年（大正11年）

■終戦時の年齢

満23歳

■聞き取り年月日

2005年（平成17年）9月15日

■戦時中・終戦時・戦後にいた場所

戦時中 江差→中国

終戦時 朝鮮

戦後 朝鮮→シベリア→江差

■戦争が始まる前

1929年（昭和4年）、五勝手分教場（柏森神社そば）に入学した。五勝手分教場で4年生まで学び、5年と6年は茂尻尋常小学校（江差消防署がある場所）で学んだ。尋常科を卒業して、柏樹高等小学校（旧檜山爾志郡役所の裏、検察庁の元建物がある場所）に3年間、岩見沢（岩見沢市）にあった空知農学校に3年間いた。家では牛を飼っていて牛乳を搾っていた。尋常科の4年生から高等科の2年生まで、毎朝上ノ国町の中須田にあったバター工場まで牛乳を運んだ。自転車に5升缶を積んで朝6時に家を出た。冬は背に5升缶を背負い馬に載せて行った。牛乳運びをしないと父は学校に行かせてくれなかった。

■徴兵検査と出征

1941年（昭和16年）3月10日、19歳のときに徴兵検査を受けた。場所は柏樹高等小学校の校舎だった。身長・体重などを測定する健康診断を受けた。また男性器の検査もされた。

1943年（昭和18年）に入^{にゅうえい} 宮^{ほくし} して北支^{げんざい}（現在の中国北部）へ向^{ちゅうごくほくぶ} かった。そこで
は軽機関銃^{けいきかんじゅう}の持ち方^も、構え方^{かた}、撃ち方^{かた}などの教育^{きょういく}を受けた。教育^{きょういく}を受けた場所^{ばしょ}は
農業地帯^{のうぎょうちたい}で平和^{へいわ}なところだった。

■戦時中

北支^{ほくし}では新兵^{しんぺい}の教育^{きょういく}係^{がかり}をしていた。関東地方^{かんとく}出身^ちの少年兵^{しょうねん}、年配^{しょうねん}の召集兵^{しょうしゅうへい}、
現地^{げんち}召集^{しょうしゅう}の少年兵^{しょうねん}などに対して教育^{きょういく}をした。

1944年（昭和19年）の夏^{なつ}に1回^{かい}だけ戦闘^{せんとう}に加わった。夜行軍^{やこうぐん}をした後の明^あけ
方^{がた}に敵^{てき}に襲撃^{しゅうげき}された。小隊長^{しょうたい}の当番兵^{ちやうばん}が小隊長^{しょうたい}を守るため一歩^{いっぽ}前^{まえ}に出て、撃たれ
て死^しんだ。味方^{みかた}は小山^{こやま}に駆け登^かって応戦^{おうせん}した。頂^{いただき} 付近^{ふきん}の窪地^{くぼち}に入^{はい}って軽機関銃^{けいきかんじゅう}を撃
った。敵^{てき}は国民党^{こくみんとう}ではなく共産党^{きやうさんとう}と思^{おも}われた。敵^{てき}ひとり^{ひとり}を撃ち殺^{ころ}した。しばらくして
敵^{てき}は逃^にげた。共産党軍^{きやうさんとうぐん}はこのようなゲリラ的^{たか}な戦^{せん}いをしていた。

1945年（昭和20年）7月^ご頃^{ころ}、朝鮮半島^{ちやうせんはんとう}へと移動^{いどう}した。

■敗戦

1945年（昭和20年）8月^{しゅうわ}15日^{にち}は、陸軍^{りくぐん}の国土防衛要員^{こくどぼうえいよういん}として朝鮮半島^{ちやうせんはんとう}にい
た。玉音放送^{ぎょくおんほうそう}は聞^きかなかったが、後^{あと}で上官^{じやうかん}から戦争^{せんそう}に負^まけたことを聞^きいた。

■抑留

敗戦^{はいせん}後^ご、すぐ^{すぐ}にソ連軍^{れんぐん}が進^{しん}攻^{こう}してきた。日本軍^{にほんぐん}はすぐ^{すぐ}に武装解除^{ぶそうかいじょ}をした。

8月末^{すえ}から9月初め頃^{はじ}、「日本^{にほん}に帰^{かえ}す」と言^いわれて興南^{こうなん}（フンナム）から船^{ふね}に乗^のせら
れた。しかし、船^{ふね}が着^ついたのはナホトカ港^{こう}だった。ナホトカから列車^{れっしや}に何日^{なんにち}も乗^のせら
れて、ウスリ収容所^{しゅうようじょ}（場所不明^{ばしょふめい}）に収容^{しゅうよう}させられた。

ウスリ収容所^{しゅうようじょ}では、木工所^{もっこうじょ}や食料倉庫^{しょくりようそうこ}などで労働^{ろうどう}させられた。木工所^{もっこうじょ}では、ウス
リ川^{がわ}で流送^{りゅうそう}してきた木材^{もくざい}を引きあげる作業^{さぎよう}をした。食料倉庫^{しょくりようそうこ}では、倉庫^{そうこ}の部屋^へに裸^{はだか}
で貯蔵^{ちよざう}されている小麦^{こむぎ}をかき回^{まわ}す作業^{さぎよう}をした。かき回^{まわ}さないと小麦^{こむぎ}が発芽^{はつが}をしてしま
うのでかき回^{まわ}していた。

食^{しょく}事はパンとスープだけだった。パンは黒^{くろ}パンで、現^{げん}在^{ざい}の食^{しょく}パンの4分の1^{しよく}ほどし
かなかった。スープといっても具^ぐがほとんど入^{はい}っていない塩汁^{しおじる}だった。

とても寒^{さむ}い日^ひにウスリ川^{がわ}で丸太^{まるた}を引き揚^ひげる作業^あをしていると、身体^{さぎよう}を温^{から}めるた
め^めにお酒^{さけ}を飲^のませてくれたことがあった。

収容所は木造で2段ベッドだった。ペチカがあったし、みんなで身体を寄せ合って寝たので、冬でもさほど寒いということはなかった。収容所内にシャワーがあった。1回だけシャワーを浴びた。

ウスリ収容所に入れられてから1年もしないうちに、貨車に乗せられてイマン（ダリネレチェンスク）へと移された。ここでは10人ぐらいで1張のテントで寝泊りした。イマンではキャベツ栽培などの農作業をさせられた。そのキャベツも、日本兵が食べるのではなく、ソ連の人たちが食べるためのものだった。

農作業の労働が一段落すると、イマンの収容所へと移された。ここはテントではなく木造の収容所で生活した。収容所では収容されている人の名前が貼り出されていたが、そこに従兄弟の名前を見つけた。この従兄弟はもともと旭川の軍隊にいたのだが、樺太（サハリン）の警察署に勤めることとなり警部補をしていた。

1947年（昭和22年）3月末に14、15人ほどの復員が決まった。収容所で「お前たちはよく働いたから日本に帰す」と言われた。収容所を出てナホトカに向かった。

ナホトカを出港する第9回目の復員船に乗船した。2、3日ほど船に乗っていた。舞鶴（京都府舞鶴市）に到着したのは3月27日のことだったと思う。舞鶴に数日間滞在し、列車に乗って青森まで来た。津軽海峡は連絡線で渡り、函館に到着した。函館には母の姉がいたので、そこで一泊した。

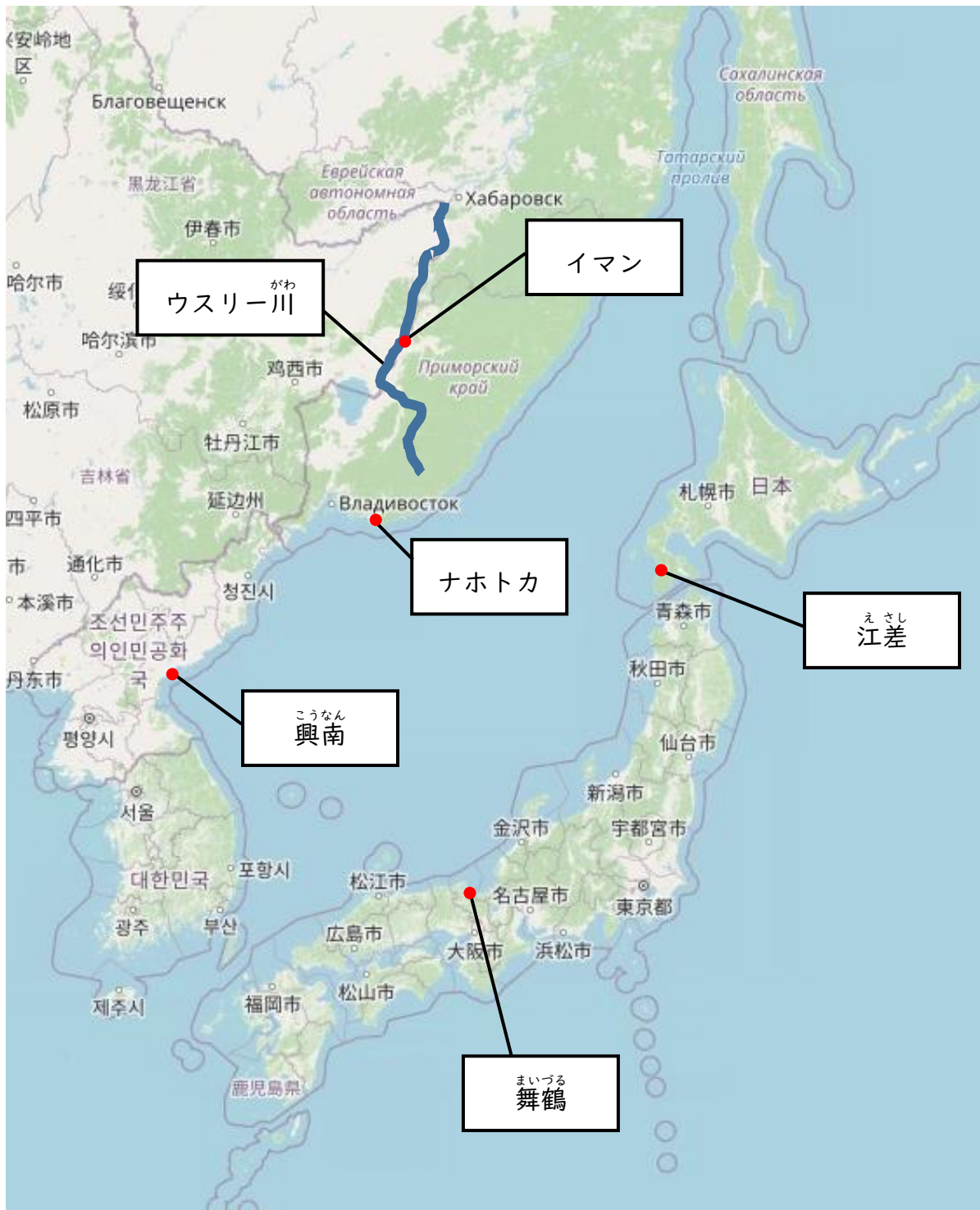
江差に帰ることができたのは5月初めだったと思う。自宅に戻ってみると、家には弟ひとりしかいなかった。実は4月3日に父が亡くなっていて、他の家族は父の実家があった熊石（北海道八雲町の旧熊石町）にまで骨納めに出掛けていた。自分が帰って来たことを熊石に伝え、みんなで家に帰って来てくれた。家族と話をすると、父は生前に「富二郎は生きて帰ってくる」と言っていたそうだ。

■戦後

岸田家では、自作分と小作分あわせて田畑を10町歩以上持っていた。畑では大豆や馬鈴薯を育てていた。五勝手（江差町南部の地域）・茂尻（江差町字茂尻町）・北村（上ノ国町）・中須田（上ノ国町）などから人を呼んで、田植で50人ほど、草刈で30人ほど、稲刈で10人ほどに手伝ってもらった。

小作は^{こさく}榎川^{えさしちょうあざとどがわちょう}（江差町字榎川町）や^{うちごう}内郷^{かみのくにちょう}（上ノ国町）に3人いた。小作料として^{こさくりょう}米^{こめ}を納めてもらった。しかし、^{のうちかいかく}農地改革^{せいふ}で政府が^{こさくち}小作地^かを^あ買い上げた。^{たんぼ}田んぼ^{たん}1反について500^{えん}円^{ねだん}ぐらいの値段だった。

自作分の^{じさくぶん}田んぼ^{たん}から^{しゅうかく}収穫^{こめ}した米は、^{やくば}役場^{しめ}で示した分量を^{ぶんりょう}供出^{きょうしゅつ}した。馬車に^{ばしゃ}米俵^{こめだわら}を載せて^{えさし}江差^{はこ}まで運んだ。^{うばがみちょう}姥神町^{えさしちょうあざうばがみちょう}（江差町字姥神町）に^{そうこ}倉庫^{そうこ}があった。



地図：OpenStreetMap（オープンストリートマップ）より

いしばしふじ お せんそうたいけん 石橋藤雄さんの戦争体験

■お名前

いしばしふじ お
石橋藤雄 さん

■生まれた年

1924年（大正13年）

■終戦時の年齢

まん 21歳

■聞き取り年月日

2005年（平成17年）11月14日

■戦時中・終戦時・戦後にいた場所

せんじちゅう えさし
戦時中 江差

しゅうせんじ こくぶ か ごしまけん
終戦時 国分（鹿児島県）

せん ご えさし
戦 後 江差

■戦争が始まる前

かしわぎこうとうしょうがっこう ねんせい と き がっこう じゅうけんじゅつ なら じ かん にっちゅうせんそう
柏樹高等小学校の1年生の時、学校で銃剣術を習う時間があった。日中戦争が
はじ ころ
始まった頃だった。

1941年（昭和16年）5月、えさしちやうやくば しゅうしよく
江差町役場に就職した。

■戦時中

とう じ しやうしゅうれいじやう やくば いっかつ とど やくば かくいえ も い
当時、召集令状は役場に一括して届けられ、役場から各家に持って行くようにし
ていた。やくば しやうしゅうれいじやう とど と き ちやうしゃ ちやうちん とも ま
役場に召集令状が届く時には、庁舎に提灯を点して待っていた。しか
し、せんそうまつ き ちやうちん とも
戦争末期には提灯を点すこともしなくなっていた。

やくば なんにん しやくいん ふ わ しやうしゅうれいじやう かくいえ も い じぶん なん
役場では何人かの職員に振り分けて召集令状を各家に持って行った。自分も何
かい けいけん
回か経験をした。ひとりが3けんから6けんほどの家を回ることが多かった。

しゅっぱつ と き じややく くん じ う とちやう くま で き
出発する時には助役の訓示を受けた。「途中で熊が出て来たらどうするか？」など
と問われたので、「一時止まって様子を見ます」などとこた
え答えた。

しやうしゅうれいじやう わた いえ い しやうしゅうれいじやう も
召集令状を渡す家に行き、「召集令状をお持ちしました。おめでとうございま

また、夜中2時頃、あるお宅に召 集 令 状を持って行くと、家の中からすぐに返事がした。話を聞いてみると、何だかこの夜は「召 集 令 状が来るんじゃないか」という胸騒ぎがして寝付けなかったそうだ。

戦争が始まった頃は何本も 幟を立てていたが、戦争末期には簡素になっていた。だが日の丸への 寄書きや千人針はしてもらった。見送りに来てくれたみんなが「万歳！万歳！」と叫ぶなか、列車の窓から顔を出して出発した。

29

りなかった。

入隊して3ヶ月後、第一次検閲といって適正を見極めての配置換えが行われた。近衛兵の候補にも拳がったようだが、中隊長の「中隊の衛生兵としたい」という意向で、月寒にあった陸軍病院で衛生兵としての教育を受けることとなった。

1945年（昭和20年）の4月頃、突然「本隊に帰れ」との命令が下った。札幌の本隊に戻ると、9258部隊は鵠川（北海道鵠川町）に移動していたので、自分も鵠川に向かった。本隊は鵠川で敵の上陸を防ぐための塹壕掘りをしていた。海岸線から陸地へ向かって、第一大隊→第二大隊→第三大隊というふうに陣を張っていた。9258部隊は第三大隊に属していて、随分と山の中にいた。鵠川駅から片道2時間ほども歩いた。本隊に合流してみると、「明日の朝、鵠川駅で別の部隊の指揮下に入れ」ということだったので、再び2時間ほどをかけて鵠川駅に向かった。

鵠川駅で別の部隊の指揮下に入ったが、向かう場所も聞かされずに列車に乗せられた。窓は鎧戸が下ろされ、風景を見ることもできなかった。列車は函館に着いた。函館駅から西別院まで歩いた。

この部隊の任務は、札幌と旭川の師団から本州へと向かう兵士や軍備の輸送だった。函館駅で貨車の連結や切り離しをするので、部隊の兵士たちは鉄道の教育を受けていた。自分は部隊に怪我人が出たときの応急手当などをしていたが、それほど忙しくはなく、同じ部隊の仲間がしている作業を見ている日々が続いた。荷物の荷札は新潟県行きとなっていたが、実際には九州へと運ばれているらしかった。

部隊の中で歯が悪くなった兵隊がいて、駅前の歯医者に連れて行った。その帰りに憲兵に会い、「何をふらついているんだ！ 司令部に連れて行くぞ！」と言われた。ビックリしてしまっただが、憲兵の顔をよく見るとむかし江差で警察官をしていたことがある人だった。からかわれていただけだった。

函館に1ヶ月ほど滞在し、1945年（昭和20年）6月頃、最後に自分たちの部隊も九州へと渡った。まず川内（鹿児島県薩摩川内市）に着いた。川内では、三角テントや民泊で寝起きしていた。噂では「自分たちは沖縄へ行くらしいが、船の用意ができていないらしい」とのことだった。

その後は沖縄に行くこともなく、鹿児島県内の各所を行軍していた。行軍は夜に行

ない、昼間は木陰で休んでいた。加治木（鹿児島県始良市）では、昼間に休んでいる最中に空襲を受けた。自分は衛生兵だったので、怪我人を応急手当して野戦病院に運んだ。死者も大勢出た。血まみれの怪我人を手当てしているうちに、耳がキーンとしてきて、気が遠くなってきた。

大隅横川駅（鹿児島県霧島市）では米軍機の機銃掃射を受けた。銃声がした時、下水の中へ逃げ込んだ。駅員2人が死んだ。1発の弾丸が2人の身体を貫通した。弾丸が身体に入った穴は小さいが、出口はグジャグジャになっていた。

鹿児島市内が空襲に遭い、何日間も燃えているのを遠くから見ている。

敗戦

1945年（昭和20年）8月15日は鹿児島県の国分（鹿児島県霧島市）にいた。自分たちの部隊はテントや民泊をして寝起きしていたが、「重大放送がある」というのでラジオのある民家に集合した。幹部たちがラジオの近くに陣取り、自分は後ろのほうで聞いていたので、何を言っているのかはわからなかった。みんなは「戦争に負けたんだ」とか「これから本土決戦だ」とか言っていて、その時には本当の内容を知ることができなかった。

2、3日経って、日本が敗戦したという正確な情報が伝わった。その時には「これで生きて帰れるんだ」と思った。

敗戦がわかってからしばらくして、隼人（鹿児島県霧島市）に移動した。隼人には航空隊の基地があった。隊員が飛行機で本州に向けて復員して行ったのか、基地には数機だけしか残っていなかった。しかし、基地には大量の缶詰が残されていた。日の丸弁当の缶詰もあった。兵舎もあったので、そこで寝起きした。

隼人には1ヶ月ほど滞在していたが、隼人を離れる時にもまだ缶詰は残っていた。隼人にいる間に体重が増えてしまった。

列車がなかなかやってくないので帰ることができなかったが、やっと部隊のみんなが無蓋車（屋根のない列車）に乗ることができた。九州から本州に入り、明石（兵庫県明石市）に入ると川が氾濫して鉄橋が落ちていた。列車を降りて歩いて迂回して次の駅に向かった。隼人を出るときに持っていた個人の装備や荷物が重いので、みんなこの時に捨てた。上官の荷物を持たされている人もいた。

その後、また無蓋車に乗って、列車は日本海の方を通り青森に到着した。青森からは船で函館に渡り、函館で流れ解散となった。

自分はそのまゝ江差に戻った。1945年（昭和20年）10月のことだった。突然だったので家族はビックリしていた。母親は自分の足元を確かめていた。

戦後

1945年（昭和20年）に江差へ戻って、しばらくたってから役場に復職した。役場では配給の仕事を担当していた。米の配給は米穀通帳を基にしていた。米穀通帳には家族全員の名前が記されていて、大人ひとりにつき1日分として2合3勺の米が当たるようになっていた。配給自体は10日ごとに10日分ずつ行われていた。戦後すぐの頃は十分な量が配給されていたが、しばらくすると遅配が起こりはじめ、そのうちに米の量が7日分や5日分、はては3日分というように減っていった。そのため、江差の人たちでも旭川方面まで行ってヤミ米を手に入れるための買出しをすることが多くなってきた。



地図：OpenStreetMap（オープンストリートマップ）より

板谷トシ子さんの戦争体験

■お名前

板谷トシ子 さん

■生まれた年

1926年（大正15年）

■終戦時の年齢

満19歳

■聞き取り年月日

2005年（平成17年）11月5日

■戦時中・終戦時・戦後にいた場所

戦時中 函館→江差

終戦時 江差

戦後 江差

■戦争が始まる前

江差高等小学校を2年で出て、函館の駅前にあった函館大妻女子高等技芸学校（函館大妻高等学校）に入学した。校長先生が厳しい人で、英語を使うと怒られた。数学のアルファベット記号も許さないような先生だった。縫物などを習う学校だったので、函館の千代台にあった銃砲連隊に赴いて靴下の継ぎなどをした。学校では竹槍の教練もした。夏には七重浜（北海道北斗市）の農家で援農をした。

1944年（昭和19年）、函館大妻女子高等技芸学校を卒業して、江差の北海道銀行に就職した。その年の秋には拓銀と合併した。

■戦時中

戦時中は男性行員が少なく、2人しかいなかった。女性行員は7人から8人ほどいた。当時は、銀行で勤務している時もモンペを着ていた。着物をほぐして上下お揃いのモンペを作っていた。

拓銀の店舗は姥神町（江差町字姥神町）にあったが、その敷地内に防空壕を掘っ

た。男性行員が少ないので女性行員が手分けをして掘った。空襲があった時に備えて書類を隠すための穴だったので、それほど大きく掘らなかったが、完成する前に戦争が終わった。

当時は本町（江差町字本町）に住んでいた。橋本町（江差町字橋本町）や馬場山に自家用の畑があり、イモ・カボチャ・アジウリ・スイカなどを育てていた。自宅の便所の地下に溜めておいた糞尿を肥桶に移しかえて、天秤棒で畑まで運んだ。

戦時中は隣組という組織があり、配給切符の配布や訓練の連絡などをしていた。私が住んでいた地域の避難場所は、新地町（江差町字新地町）にあった池（現在、商店街の駐車場がある場所）だった。竹槍の訓練は松ノ岱（江差町字緑丘）のグラウンドで行なった。

私の兄は沖縄戦で戦死した。函館の師範学校（北海道教育大学函館校）を出て、江差小学校で1年間教員をしていたが、豊橋（愛知県豊橋市）の士官学校に入った。士官学校を3番目の成績で出て、満州に出征し、その後に沖縄へとまわっていた。階級は少尉で小隊長をしていた。

戦争が終わる前に戦死公報が届いた。1945年（昭和20年）4月12日の戦死となっていた。しかし遺骨は届かず、函館のお寺で木の位牌を引き取っただけだった。お葬式は江差町で出してくれた。私は死んだところを見ていないので、どこかで兄が生きているような気がしていた。

戦後、兄の小隊にいて生き延びた人が江差を訪ねて来てくれた。その人の話によると、兄は小隊の先頭に立って「進め！進め！」と指揮していたが、米軍の弾丸を身体に受けて立ったまま死に、兄の遺骸を病院に運んだところ、身体の中から7発の弾丸が見つかったそうだ。

■敗戦

1945年（昭和20年）8月15日のことはよく覚えていない。当時勤めていた拓銀の職場で聞いたのだろう。

日本が戦争に負けたと知った時は、負けて悲しいと思った。

■戦後

戦後は米が不足していたので、農家へ行って着物などと交換していた。私も列車で

ふかがわ ほっかいどうふかがわし 深川（北海道深川市）にいた知り合いの農家まで行き、着物と米を交換したことがある。農家では、絹生地よりも木綿生地の方が人気があった。着物をほどいて農作業用の服にしやすいということだった。



地図：OpenStreetMap（オープンストリートマップ）より

まつむらたかし せんそうたいけん 松村 隆 さんの戦争体験

■お名前

まつむらたかし
松村 隆 さん

■生まれた年

1926年（大正15年）

■終戦時の年齢

満19歳

■聞き取り年月日

2005年（平成17年）8月27日～28日

■戦時中・終戦時・戦後にいた場所

戦時中 江差→樺太（サハリン）

終戦時 樺太（サハリン）

戦 後 樺太（サハリン）→シベリア→江差

■学校生活

水堀小学校（現在の江差北小学校）の尋常科に入学したのは1933年（昭和8年）4月だった。日中戦争が始まった1937年（昭和12年）頃から軍国主義的教育が多くなってきたような気がする。水堀小学校の高等科に入ると、行進の訓練を行った。

教育勅語は5年生のころには暗唱できた。

四大節（1月1日の四方拝・2月11日の紀元節・4月29日の天長節・11月3日の明治節）は休日だったが、朝には小学校の屋内運動場に全校生徒が集まった。普段は着物などで学校に行っていたが、四大節の時には金ボタンの付いた学生服を着て行った。

校庭の端に、御真影（天皇の肖像画）と教育勅語が収まっているレンガ造りの奉安殿が建っていた。白手袋をした校長が、奉安殿から屋内運動場の神棚に御真影と教育勅語を移した。校長が教育勅語を読んで訓示を述べた。

式は1時間ほどで終わった。時には大福餅や饅頭が配られることもあった。

■ 出征

戦争中は満20歳で召集されたが、19歳だった1945年(昭和20年)7月に繰り上げて召集された。当時は泊村役場(江差町の北部地域あった泊村の役場)に勤めていた。

札幌の連隊に入隊することとなったが、当時住んでいた泊村の柳崎(江差町字柳崎町)から江差駅まで歩いていった。

親戚などが「祝出征 松村隆君」と書かれた幟を持って同行した。この幟は白い生地の上に日の丸が染め抜かれたもので、余白の部分へ字の上手な人に文字を書いてもらった。

江差駅を出発する時にはみんなに万歳をしてもらい「勝って来ると勇ましく…」と歌ってもらった。

■ 従軍

札幌の連隊に同期で入隊したのは150人ほどだった。そのうち約50人が札幌に残り、約100人が樺太(サハリン)へ行くこととなった。自分は樺太行きの方だった。宗谷海峡にはアメリカ軍やソ連軍の潜水艦が潜んでおり、輸送艦に魚雷をもらう心配があった。稚内(北海道稚内市)に10日ほど滞在していた。

軍隊では航空情報隊に配属された。レーダーで船や飛行機を探る役だった。樺太では山の中の基地でレーダー操作の訓練をしていた。

戦闘に加わることはなかったが、ソ連軍の戦闘機から機銃掃射を受けたことが1回あった。その時には基地を出て藪に逃げ込んだ。

■ 敗戦

1945年8月15日、「重大発表がある」ということで中隊が集められ、ラジオで玉音放送を聞いた。しかし、雑音がひどくて何を言っているのかわからなかった。

その日のうちに本部から指令があり、敗戦を知った。「これで戦争が終わったから日本へ帰ることができる」と思い、ホッとした。

■ 抑留

ソ連軍が樺太に侵攻してきた。街はソ連軍に占領されたが、自分たちのいたレーダ

一基地は山の中にあったので、ソ連軍が基地の存在に気付かず、1週間ほど基地で過ごした。

樺太滞在中は風呂にも入れずに不衛生だった。体中にシラミが付いた。夜眠る時に静かにしていると、シラミが身体中を動き回っているのがわかった。

1945年(昭和20年)11月、「日本に連れて帰る」と言われて樺太から船に乗った。船が進んで進行方向右側に陸地が見えてきた。日本海を通過して函館に着くつもりでいたので、「おかしいな、北海道は左側に見えなければならないが…」と思っていた。仲間が「なあに、オホーツク海側を通過しているのだろう」と言っていた。みんな日本に帰ることができると思っていた。ナホトカに着いた時にも、一時係船しているだけだと思っていた。

ナホトカで収容所に入れられるとわかった時にはショックだった。重労働が頭に浮かんだ。

ナホトカの収容所には、日本兵が2,000人ほど収容されていた。

朝は6時に起床して屋外で点呼を取った。ソ連軍の将校は掛算ができないらしく、何回もやり直していた。6時30分に朝食をとった。食事は黒パン一切れと魚のくずや野菜が入った潮汁だった。食事の内容は昼も夜も同じようなものだった。食料が不足した時などは、コーリャン(黍のような穀物)と大豆の煮物が、飯盒の蓋に1杯しかあたらなかった。いつもお腹が空いていた。

朝食が終わると、収容所を出てナホトカの街へ行き、強制労働をさせられた。労働の内容は、防波堤工事、港湾や鉄道貨車で荷役、住宅の建築などで、だいたい20人ぐらいずつの班に分けられた。1日に10時間以上仕事をした。冬などは宿舎に帰るのは日が沈んでからだった。ナホトカに着いた時には港に小さな防波堤が1本しかなかったが、復員する時には大きな輸送船が係留できる岸壁となっていた。

宿舎は3間から4間(約5m40cmから約7m20cm)ほどの幅で、その両壁に棚のような2段ベットがあった。ひとり分のスペースは6尺×3尺(約180cm×約90cm)ほどで、高さは立ち上がることができないくらいだった。収容所にあった毛布を敷布団代わりとし、日本軍から支給されていた1枚の毛布を掛布団とした。窓は埋め込みで開けることができなかった。換気は出入口でしかすることができず、

しゆくしゃ なか くう き わる
宿 舎 中 の 空 気 が 悪 かった。

ふく に ほんぐん ぐんぶく き ふゆ ぐんたい がいとう き したぎ ほりよ
服 は 日 本 軍 の 軍 服 を そ の ま ま 着 て い た 。 冬 は 軍 隊 の 外 套 を 着 た 。 下 着 な ど は 、 捕 虜
に な っ た と き に 持 っ て い た 分 だ け で 過 ぎ し た 。

じゅうろうどう れつあく かんきょう げんいん びょうき ほりよ しゅうようじょない しんりょうじょ
重 労 働 や 劣 悪 な 環 境 な ど が 原 因 で 病 気 に な る 捕 虜 も い た 。 収 容 所 内 に は 診 療 所
も あ っ た が 、 くすり ふそく びょうき け が し い み
薬 な ど が 不 足 し て い た の で 病 気 や 怪 我 は 死 を 意 味 し た 。

しゅうようじょせいかつ ご おぼ そん おも おぼ かんたん たん ご
収 容 所 生 活 で は ロ シ ア 語 を 覚 え な い と 損 を す る と 思 っ た の で 覚 え 、 簡 単 な 単 語 を
つら かい わ
連 ね て 会 話 を す る こ と が で き る よ う に な っ た 。

じぶん はじ けんちくはん だいくしゅっしん へいたい て もと のち えんげいはん
自 分 は 初 め 建 築 班 と な り 、 大 工 出 身 の 兵 隊 の 手 元 な ど を し て い た が 、 後 に 演 芸 班 へ
と 移 っ た 。 えんげいはん きやうせいらうどう ほりよ なぐさ よる こうえん おこ
演 芸 班 と は 、 強 制 労 働 を し て き た 捕 虜 を 慰 め る た め 、 夜 に 公 演 を 行 な う
こ と が 仕 事 だ っ た 。 し ご と に ほんへい なか げいにん もの
日 本 兵 の 中 に は も と も と 芸 人 を し て い た 者 も い て 、 そ う い う 人 た
ち は 演 芸 班 と な っ た 。 えんげいはん じぶん うた うた けんちくはん えんげいはん か も
自 分 は 歌 な ど を 歌 っ た 。 し ば ら く は 建 築 班 と 演 芸 班 を 掛 け 持 ち
し て い た が 、 えんげいはん し ご と ひる し ご と だいぶんらく
演 芸 班 の 仕 事 だ け に な る と 昼 の 仕 事 が な く な っ て 大 分 楽 に な っ た 。

しゅうようじょ に ほんしんぶん しんぶん かんこう に ほんご か しんぶん
収 容 所 で は 「 日 本 新 聞 」 と い う 新 聞 も 刊 行 さ れ て い た 。 日 本 語 で 書 か れ て い る 新 聞
だ っ た が 、 内 容 は 多 分 に ソ 連 軍 に よ る 思 想 教 育 を 含 ん で い た 。 こうえん
公 演 も 、 も と も と
しそきやういくてき ないよう つよ だれ み に ほんへい えんげいはん
思 想 教 育 的 な 内 容 が 強 か っ た が 、 誰 も 見 な い の で 日 本 兵 の な か で 演 芸 班 を つ く ら せ た
けい い
と い う 経 緯 が あ っ た 。

ご ふくいん き ち ひ かくてきかいがい し せん あつ ばしよ
そ の 後 に ナ ホ ト カ は 復 員 基 地 と な り 、 比 較 的 海 外 の 視 線 も 集 ま る 場 所 だ っ た の で 、
しゅうようじょ せいかつ よ ほくぶ しゅうようじょ ぞうざい たんこう
ナ ホ ト カ の 収 容 所 の 生 活 は ま だ 良 い ほう だ 。 も っ と 北 部 の 収 容 所 で 、 造 材 や 炭 鉱 の
ろうどう ひと
労 働 を さ せ ら れ て い た 人 た ち は 、 も っ と ひ ど か っ た 。

しょうわ れんぐん しょうこう き こく
1 9 4 7 年 (昭 和 2 2 年) 1 月 、 ソ 連 軍 の 将 校 か ら 帰 国 さ せ る と い う こ と を 聞 か さ
れ た 。 た だ 、 ナ ホ ト カ の み など れん ふね の
港 で ソ 連 の 船 に 乗 る よ う だ と 、 ま た ど こ に 連 れ て 行 か さ れ る
かわからないので不安だったが、 ふ あん み など に ほん ふね み と き ことば い あらわ
港 で 日 本 の 船 を 見 た 時 に は 言 葉 で は 言 い 表 せ な い
かんじょう
感 情 に な っ た 。

じぶん ふくいんせん だい せん の まいづる きやうとふまいづるし ふくいん まいづる
自 分 は 復 員 船 の 第 2 船 に 乗 る こ と が で き 、 舞 鶴 (京 都 府 舞 鶴 市) に 復 員 し た 。 舞 鶴
めんえきけん さ しゅうかん
で 免 疫 検 査 な ど が あ り 、 2 週 間 ほ ど 過 ぎ し た 。

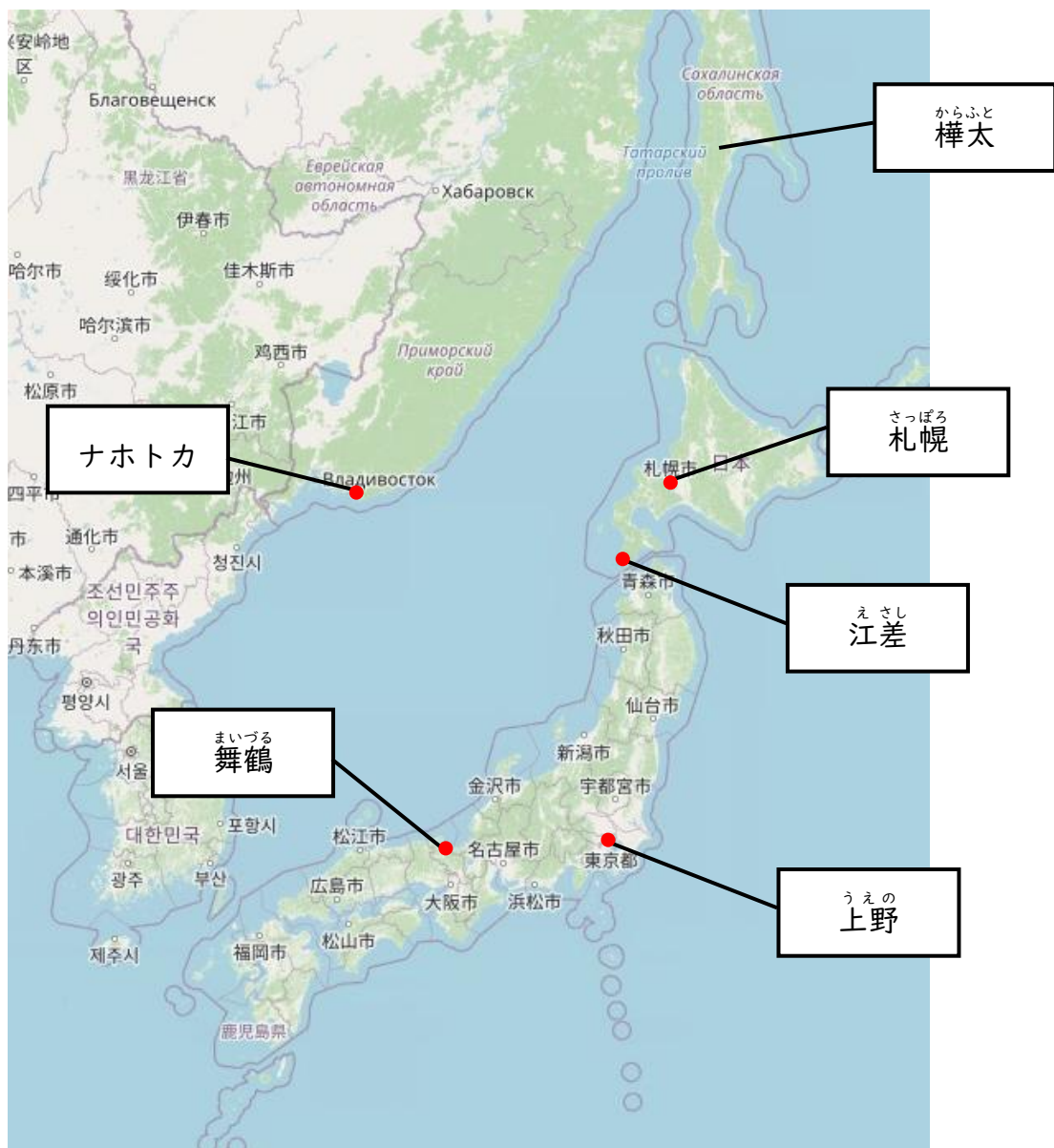
ご かね きしゃ ききやう とちゅう うえ の えき とうきやうと ふうけい み
そ の 後 、 お 金 を も ら っ て 汽 車 で 帰 郷 し た 。 途 中 、 上 野 駅 (東 京 都) で 風 景 を 見 た が 、
いちめん や の はら なか た なら
一 面 焼 け 野 原 の 中 に バ ラ ッ ク が 立 ち 並 ん で い た 。

ききょうご とまりむらやくば ふくしよく
帰郷後は泊村役場に復職した。

せんご はいきゅうせいど つづ い しょく おお ぶっし はいきゅう さいご
戦後しばらくは配給制度が続いた。衣・食など多くの物資が配給されたが、最後
まで続いたのは米だった。配給物資は泊村役場から各地域に配分した。

とまりむら べいさくのうか おお のうち いんかい さてい いんかい そしき
泊村では米作農家が多くいた。農地委員会のなかに査定委員会という組織があり、
さくち よそうしゅうかくだか さてい さてい くに かい あ こめ りょう
作地の予想収穫高を査定していった。その査定によって国へ買い上げされる米の量
が決まるので、文句も多かった。

しゅうかく こめ くに か あ ぶん いがい じ かしょうひ まわ よじょうぶん
収穫した米のうち、国に買い上げられた分以外は自家消費に回り、さらに余剰分は
ヤミ米となった。函館などから知人や親戚を頼ってヤミ米を買いに来ていた。お金に
は価値がなく、着物などのモノと米を交換していた。



地図：OpenStreetMap（オープンストリートマップ）より

やまぎしじゅんいち せんそうたいけん
山岸 淳一 さんの戦争体験

■ お名前

やまぎしじゅんいち さん
山岸 淳一

■ 生まれた年

1928年（昭和3年）

■ 終戦時の年齢

まん さい
満 17 歳

■ 聞き取り年月日

2005年（平成17年）9月8日

■ 戦時中・終戦時・戦後にいた場所

せんじちゅう はこだて
戦時中 函館

しゅうせんじ いわくに やまぐちけん
終戦時 岩国（山口県）

せん ご え さし
戦 後 江 差

■ 学校生活

たいへいようせんそう はじ しゅうわ はこだてちゅうがく ほっかいどうはこだてちゅうぶこう
太平洋戦争が始まった1941年（昭和16年）は、函館中学（北海道函館中部高
こう）の1年生だった。戦争が始まったことを聞いた時、子供心に「この戦争は勝つ戦
で、負けることはない」と思った。

なんねんせい とき わす はこだてちゅうがく とき がっこう かつどう いまかね ほっかいどういまかねちゅう
何年生の時は忘れたが、函館中学の時に学校の活動として今金（北海道今金町）
のかみおか ち く えんのう い はこだて き しゃ の い のう
の神丘地区に援農をしに行った。函館から汽車に乗って行った。みんなそれぞれの農
か と ほ おも しょくじ のう か
家に泊まってイモ堀りをした。1ヶ月ぐらいいはいたと思う。食事それぞれの農家で
だ こめはんぶん や さい はんぶん はん はこだて
出してくれた。米半分にイモやカボチャなどの野菜が半分入ったご飯だった。函館で
げしゅくせい た もの か
は下宿生活をしていたが、食べ物が変わらなかった。

じぶん い がっこう こうじょう て だ い せい と
自分は行かなかったが、学校から工場の手伝いをしに行く生徒もいた。

じゅぎょう こうしん じゅう う かた きょうれん がっこう たま て
授業でも行進や銃の撃ち方などの教練をしていた。学校には弾が出ないように
してある本物の銃があった。

■ 出征

1945年（昭和20年）4月、函館中学を卒業しないうちに、志願して海軍兵学校の予科に入った。初めに長崎県の針尾（長崎県佐世保市）へと行ったが、米軍の空爆にあって、7棟から8棟あった建物が全焼した。死んだ人はいなかったが、その時には死を意識した。

その後、山口県の岩国（山口県岩国市）へと移った。

敗戦

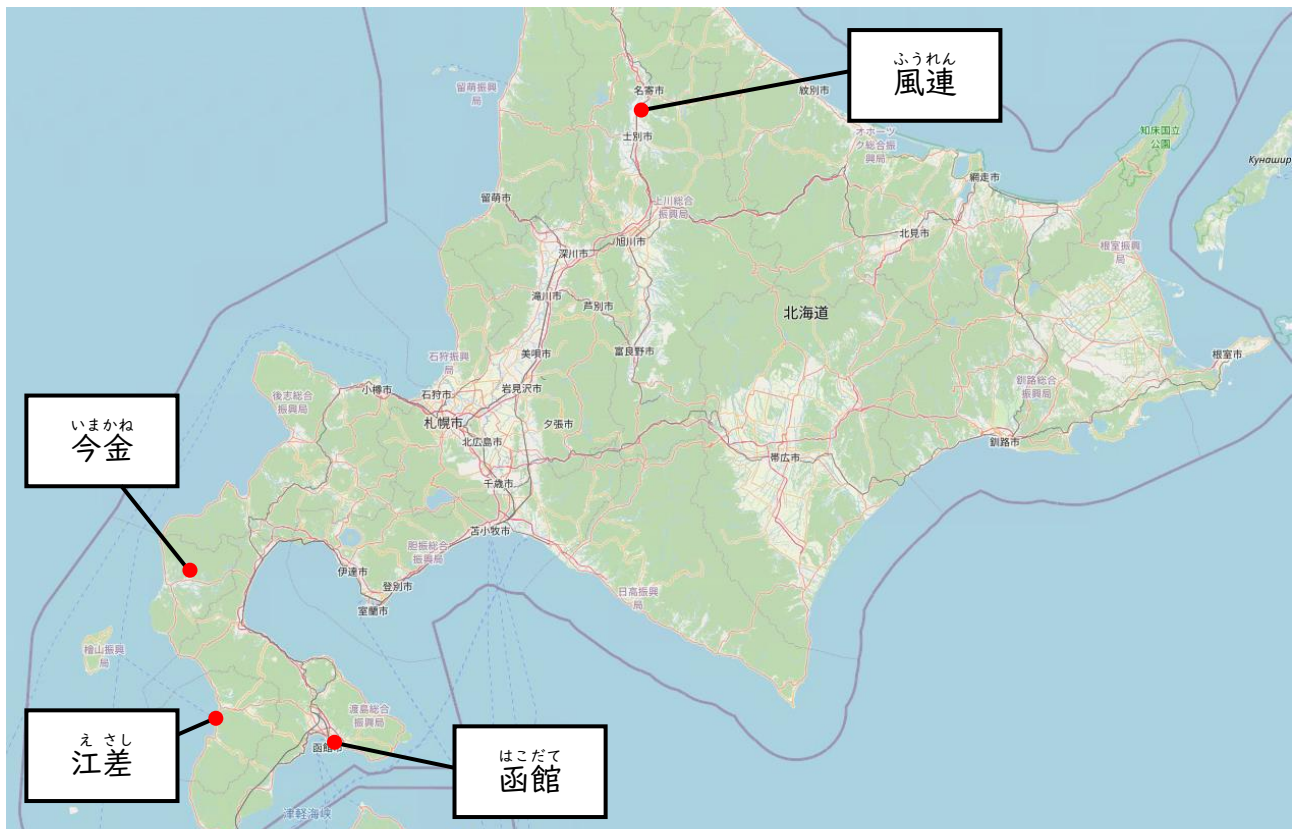
1945年（昭和20年）8月15日の玉音放送は岩国で聞いた。生徒がみんな集められた。その時は何を言っているのかわからなかったが、後で教官から日本が負けたことを聞いた。

復員

1945年（昭和20年）9月、岩国を汽車で出発して北海道への帰途についた。乗ったのは無蓋（屋根がないこと）の貨物車だった。荷物と一緒に乗っていた。途中、原子爆弾を落とされた後の広島を見た。コンクリートの建物がいくつか残っているだけで、あとは何もなかった。上野から青森までも汽車に乗った。青森まで1週間ほどかかった。睡眠はほとんど汽車の中だった。食事は駅で買ったり支給されたおにぎりを食べた。青森から函館までは機帆船に乗った。2日ぐらいかかった。函館からは江差までは汽車で帰ってきた。

戦後

戦争が終わって、まだ函館中学に籍はあったが復学せず、江差で暮らした。兄が津花（江差町字津花町）から鷗島に向かう渡りケーソンの途中で製塩工場を始めたので、そこで勤めた。汲んだ海水を大きな鍋で煮て塩を作った。その製塩工場も5年から6年ほど続いた。工場で作った塩を持って汽車に乗って、内陸の風連（北海道名寄市）の方にまで行った。そこで塩と農作物を交換した。



地図：OpenStreetMap（オープンストリートマップ）より



地図：OpenStreetMap（オープンストリートマップ）より

成田喜美子さんの戦争体験

■お名前

成田喜美子 さん

■生まれた年

1931年（昭和6年）

■終戦時の年齢

満14歳

■聞き取り年月日

2005年（平成17年）10月27日

■戦時中・終戦時・戦後にいた場所

戦時中 江差

終戦時 石崎（北海道上ノ国町）

戦 後 江差

■戦時中

1944年（昭和19年）に豊川町（江差町字豊川町）にあった女学校へ入学した。女学校では授業をすることはほとんどなかった。女学校のグラウンドは、イモやカボチャの畑になっていた。

当時、家は愛宕町（江差町字愛宕町）にあり、蔬菜の種を販売していた。父と兄4人が召集され、私が下の兄弟の面倒を見ながら暮していた。

愛宕神社の付近には自家用の畑があり、イモ・ダイコン・ニンジン・キャベツなどを育てていた。愛宕神社へと続く坂道を肥桶を担いで登った。

当時は水道がないので、井戸まで水を汲みに行った。飲み水は、新栄町（江差町字新栄町）の中の橋近くにあった井戸まで水を汲みに行った。1日に何回も天秤棒に担いで水汲みをした。洗濯も、蝦夷館観音がある山の麓を流れている川まで洗濯物をリアカーに積んで運んだ。

日々の食事もイモケッコ（イモのおかゆ）がほとんどだった。生米を磨いでおいて、

なま いっしょ なべ に しお あじつ
生イモと一緒に鍋で煮た。塩で味付けをした。

1945年（昭和20年）になると、今金町（北海道今金町）のトマンケシへ援農に行った。今金小学校に寝泊りし、朝5時に起きてトマンケシまで30分ほど歩いた。その農地は学校のグラウンドほどもあり、草刈をする時などキリがないような気がした。お昼ご飯は、その農家でおにぎりをだしてもらった。函館中学の生徒も援農に来ていた。函館中学の生徒は農家に寝泊りしていた。

今金町での援農が終わると、石崎（北海道上ノ国町）のベニヤ工場へ行って作業を手伝った。江差から石崎まではトラックの荷台に乗って行った。工場では「神風」と書いてある鉢巻を巻いて作業した。できあがったベニヤの移動や荷造りをした。怪我をしたら、発動機の付いた船で江差の病院に向かった。このベニヤが何に使われるのかと思って工場の人に聞いてみたら、飛行機の部品になるとのことだった。ベニヤを裁断する機械で、手首から先を切断してしまった人もいた。作業をしていておそろしかった。



じやがっこう じ だい なり た
女学校時代の成田さん

石崎ではお寺に寝泊りしていた。本堂にみんなで寝ていたが、骨箱が並んでいて怖かった。トイレも外にあって怖くて行くことができなかった。食事はみんなで当番を決めて作っていた。おかゆ・ニラの汁物・漬物などを食べていた。お風呂にも入らなかった。

■ 出征

私の上には4人の兄がいるが、4人とも召集された。

1番上の兄が召集されたのは、太平洋戦争が始まって1、2年ほどが経ってからだった。千人針を縫ったり、日の丸に寄せ書きをしたりした。出征の日にはみんなで江差駅まで見送りにいった。

3番目の兄が召集された時には、函館まで行って連絡線に乗った兄を見送った。この兄はトラック島（ミクロネシア連邦のチューク諸島）で戦死した。写真が1枚と

い ひんすうてん もど
遺品数点が戻ってきたが、い こつ かえ
遺骨は帰ってこなかった。

はいせん
敗戦

1945年(昭和20年)8月15日は、いしざき こうじょう
石崎のベニヤ工場にいた。お昼にみんな
あつ ぎよくおんほうそう き なに い
で集まって玉音放送を聞いた。何を言っているのかはわからなかったが、あと せんそう
後で戦争に
ま 負けたんだということを聞いた。家に帰れると思ってうれしかった。

つぎ ひ
次の日ぐらいには、いしざき え さし もど
石崎から江差へと戻った。



地図：OpenStreetMap（オープンストリートマップ）より

もり た けい こ せんそうたいけん 森田慶子さんの戦争体験

■ お名前

もり た けい こ
森田慶子 さん

■ 生まれた年

1937年（昭和12年）

■ 終戦時の年齢

まん さい
満8歳

■ 聞き取り年月日

2005年（平成17年）11月8日

■ 戦時中・終戦時・戦後にいた場所

せんじちゅう ちょうせん
戦時中 朝鮮

しゅうせんじ ちょうせん
終戦時 朝鮮

せん ちゅうせん あいぬま
戦 後 朝鮮→相沼（八雲町）

■ 森田慶子さんの手記

わたし くまいし あいぬまちょう ほっかいどうやくもちょうくまいししゅうぬまちょう う
私は、熊石の相沼町（北海道八雲町熊石相沼町）で生まれた。

1939年（昭和14年）の4月、朝鮮の最北端で中国・ソ連との国境近くの雄
基（羅先特別市）という町で手広く貿易商を営む叔父夫婦の元に行き、養女となっ
た。それから1942年（昭和17年）、1943年（昭和18年）頃までは、何不自
由のない幸せな生活をしていた。

みなとまち ゆう き おお ふね せかいじゅう ぶつ し はこ かっこく ひとびと いじゅう
港町である雄基へは、大きな船が世界中から物資を運び、各国の人々がかなり移住
していたようにも記憶している。父は特に海産物を取り扱っていたので、各地から船
が港へ入る度に、父に港へ連れて行ってもらった。船に乗せてもらった事もあった。

わ や に ほんじん はたら ちゅうせんじん ちゅうごくじん に
我が家では日本人が14、15人働いていて、朝鮮人や中国人もかなりいた。日
本からの荷物は大きな倉庫に山積みされた。倉庫はトラックが荷物を積んだまま出
入りすることができるほどの広さだった。

わ や みぎ くだものどん や ひだり いるいどん や いま おも とん や がい
我が家の右は果物問屋、左は衣類問屋で、今にして思えば問屋街だったのだろう。

わが家は、父^ふ母^ぼと4つ^{ちが}違^{あに}いの兄^{かぞく}の4人家族^だった。

5歳^{ころ}になった頃^{まいにち}から、毎^は日^てのよう^ひに母^{せんち}に手^いを引^{へいたい}かれ、戦^み地^{おく}へと行く兵隊^{を見送り}に出^で掛^かけた。函^{はこ}館^{だて}から来^きた母^{はは}の甥^{おい}にあたる健^{けん}ちゃんをは^いじめ、家^{いえ}で働^{はたら}いていた人^{ひと}がひとり、ふたりと出^{しゅっせい}征^いして行くと、それにあ^{せんそう}わせたよう^{はげ}に戦^ま争も激^ましさを増^ましてきたよう^に感じた。

しかし、私^{わたし}たちの住^すんでいた場^ば所^{しょ}は比^ひ較^{かくてき}的^{あんぜん}安全^ち地^{たい}帯といわれ、空^{くう}襲^{しゅう}警^{けい}報^{ほう}が鳴^なり響^{ひび}いてもそ^{おそ}んなに恐^{ひと}れる人^もい^なか^なった。

そ^ひんなある日^に、日^に本^{ほん}人^{じん}学^が校^{っこう}のグ^らウ^ンドにB29^が着^{ちやく}陸^{りく}して街^{まち}中^{じゅう}が大^お騒^{さわ}ぎとな^なった。子^こ供^{ども}たちは恐^{おそ}る恐^{おそ}る見^みに行^いき、ア^{へい}メ^いリ^か兵^{へい}からチ^{チュー}ー^{イン}ガ^ムをもら^{もら}ったりして、そのま^{あそ}わりで遊^{こと}んだ事^{こと}をお^おぼ^おえてい^いる。

それが街^{まち}の様^{よう}子^すを下^{した}見^みに來^きたとも知^しらず、2、3日^ご後^{だい}に大^{だい}爆^{ばく}撃^{げき}を受^うけてしま^{しま}った。700mから800mある街^{まち}の裏^{うら}山^{やま}を登^{のぼ}るとソ^{れん}連^{れん}の街^{まち}が見^みえる場^ば所^{しょ}なので、ソ^{れん}連^{れん}の飛^ひ行^{こう}機^きを恐^{おそ}れ、ア^{ばく}メ^{げき}リ^かの爆^{かん}撃^がなど考^{かん}え^えてもい^いな^なか^なったよう^{よう}だ。

1944年^{しょうわ}（昭^あ和^す19年）7月26日の朝^{あさ}8時^す過^ごぎにサイ^{だい}レ^{ばく}ン^{げき}が鳴^うった。サイ^なレ^なンととも^なに店^{みせ}を閉^しめたり、街^{まち}を行^いき交^かう人^{ひと}々^{びと}もあ^あわ^わた^ただ^だしくな^なって^てい^いた。

母^{はは}から「こ^{とき}んな時^{とき}はラ^らン^どセ^{セル}でな^なく、リ^りュ^るック^くを背^せ負^おって準^{じゅん}備^びするん^んです^すよ」とい^いわれ、兄^{あに}に手^て伝^{つた}ってもら^{もら}って防^{ぼう}空^{くう}頭^ず巾^{きん}を被^{かぶ}り、救^{きゅう}急^{きゅう}袋^{ぶくろ}を背^せにかけ^{かけ}て^てい^いたら、突^{とつ}然^{ぜん}大^{おお}き^きな音^{おと}と共^{とも}に真^まっ暗^{くら}になり、ガ^{おと}ラ^たスは音^わを立て^{てん}て割^{せん}れ、電^き線^{せん}は切^きれ、電^{でん}柱^{ちゅう}は倒^{たお}れ、い^{いち}めん^{めん}火^ひの海^{うみ}とな^なって^てしま^{しま}った。

父^{ちち}は銀^{ぎん}行^{こう}に行^いったま^まだ^だた^たった。母^{はは}は兄^{あに}と私^{わたし}を抱^{かか}えるよう^{よう}に^にして防^{ぼう}空^{くう}壕^{ごう}に行^いったが、近^{ちか}く^{ちか}の防^{ぼう}空^{くう}壕^{ごう}は潰^{つぶ}されて^てい^いたので、煙^けの中^{なか}を走^{はし}ってや^やっ^みと見^みつ^つけた防^{ぼう}空^{くう}壕^{ごう}に入^{はい}ろう^うとし^した。

その時^{とき}、数^{かず}えき^きれ^れないほ^ほど^どの飛^ひ行^{こう}機^きがど^どん^どん^ど爆^{ばく}弾^{だん}を落^おとし、あ^あち^ちら^らで^でもこ^こち^ちら^らで^でもド^どカ^かン^んと真^ま黒^{くろ}い煙^けに包^{つつ}まれ^れて^てしま^{しま}った。

地^{じめん}面^{めん}がぐ^うら^ごぐ^ごらと動^じき、地^じ響^{ひび}き^きを立^たて^て割^われて^てい^いった。

道^{どう}路^ろにふ^ふせ^せた私^{わたし}を、「危^{あぶ}ない！」と大^{おお}声^{こえ}で叫^{さけ}んで抱^だき込^こむよう^{よう}にか^かば^ばって^てく^くれ^れた田^た中^{なかつ}さん^{さん}のお^おじ^じさん^{さん}は、その時^{とき}に爆^{ばく}弾^{だん}の破^は片^{へん}が背^せ中^{なか}から貫^{かん}通^{つう}し、内^{ない}臓^{ぞう}が全^{ぜん}部^ぶ外^{そと}に出^でて^てしま^{しま}い、無^む残^{ざん}な姿^{すがた}で死^しん^んで^てしま^{しま}った。

そんな事とも知らない私は、背中があまりに重いので「おじちゃん、重いよ」と言
ったことを、60年経っても鮮明に思い出される。

その晩、父はとうとう帰らず、一晚防空壕で過ごした。

翌朝、裏山に逃げ込んだ。私たち子供は、数人ずつ布団を被せられたり、草をかけ
られたりして、とにかく「声を出してはいけない」と言われた。母は食べ物と父を探
すために2、3人で出掛けた。ご飯を炊いている時間が恐ろしくて、まだ生煮えのま
まの鍋を持って山に戻った。恐ろしさで震えが止まらず、食べ物も喉を通らず、普段
からリュックに入れてあった少しの砂糖をなめて過ごした。

父がやっと私たちを探し当ててくれたが、「ここも危ない。もうすぐ艦砲射撃を受
けるから、ここにはいられない」と言い、山伝いに歩き始めた。水平線にたくさんの
軍艦が攻め寄せているのを見ながら逃げた。

少しばかりの食べ物もなくなっていき、水筒の水も少なくなっていった。「水を飲み
たい。水はないか」と眼を皿にし、耳を立て、川の流れる音でもしなかと歩いた。
野宿しては歩き、夜が明けるとまた歩く。そんな日々が続いた。道端で雨水をすすり
上げている人もいたが、母から「我慢するんだよ。お腹をこわしては日本に帰れない
よ。すっぱい梅干しを食べた時を思い出すのよ」と励まされ、泣きながら歩いた。
たえられずに引き返した人も多くいたそうだが、生き延びた人はひとりもいなかった
そうだ。

やっとの事で川に出たが、対岸が見えないほどの川幅があって、流れも速かった。
しかし、渡らなければ咸興（咸興市）という街に行けない事がわかり、父や数人が泳
ぎ出した。小柄な父は、まず自分のリュックを頭に結び付けて川を渡った。次に兄を
肩車に乗せて渡り、次は私をおんぶして渡り、そして母を紐で結び付けて渡った。
一家4人が川を渡った時はもう真っ暗闇で、そのままそこで野宿した。

その夜は大雨となったが、父も母も一睡もせずに2人の子を守ってくれた。早朝、
父が木の実や草の根を採って来たので、食べて歩き出した。夕方に着いた集落はすっ
かり焼け野原となっていて、人はひとりも見当たらず、見付けても爆撃で死んでいる
人だけだった。

何日も食事をしていない私たちは、自分の物も他人の物も区別が付かないように

なっていた。暗くなるのを待ち、グループでその辺の畑からトウモロコシ、イモ、カボチャなど盗み、鍋なども手当たり次第に集めて煮炊きした。お腹が破れるほど食べた。

それからまた何日か歩き、そのあいだに何度となく爆撃を受けたが、やっと念願の咸興に着き、母の昔の友人を見付けてお世話になることとなった。

ここで8月15日を向えた。

日本人に勝ったとして、「今まで我々は日本人に使われ、ひどいことばかりされた」と大声で泣き叫ぶ朝鮮人がいた。日本人は、見つかったらひとり残らずめった切りにされ、家には火を付けられ、窓ガラスには石を投げられた。一步も家から出られなくなって、縁の下に穴を掘ってそこに隠れていた。

日光に当たることもなく、食べ物もなく、体力もなくなっていった。さらに日本人の家は没収されることとなって、ここにもいられなくなった。

やっとのことで無蓋車（屋根のない貨車）に乗り込むことができた。女の人には顔に墨を塗り、男の服を着て、頭は丸坊主にして帽子を被り身を守った。それでも見つけられて、無残な最後を遂げた人が大勢いた。

隣の駅に着かないうちに無蓋車を降ろされた。線路伝いに歩き、草や木の根を探しては食べる毎日が続いた。

とうとうソ連の兵隊に見つかり、12月20日にフウヒョク（場所不明）という山の中を10時間も無蓋車に乗せられ、避難民として監禁されることとなった。

寒さは厳しく、オシッコをしているうちに下から凍るほどだった。零下30℃を下回る駅からさらに山を登り、ソ連兵に銃を向けられながら着いた場所は、窓も床板もない、風が自由に通り抜ける元兵隊の幕舎だった。床板のない土の上に、蕨1枚に2人の割合で入れられた。

我が家は4人で2枚の蕨をもらったが、敷く場所がなかった。その夜は蕨を被って震えながら一夜を明かした。寒くて寒くて凍える手と足を、父は懐に入れたり擦ったりして温めてくれた。

朝になって驚いたことには、約30人もが凍死をしていた。入口に積まれた死体を近くの山に穴を掘って埋めたが、すぐに手や足を犬に食われた。それはそれは恐ろし

い出来事^{できごと}だった。

3日目になって、やっと蕤^{むしろ}を敷く場所^しを見つけることができた。

寒^{さむ}さと栄養失調^{えいようしつちょう}で飢え死^うにする人^{ひと}が後^{あと}を絶^たたず、死体^{したい}を埋める穴^うを掘^{あな}る場所^ほがな
いほどだった。初^{はじ}めのうちはひとつの穴^{あな}に5人とか10人とか入^いれていたが、そのう
ちにただ山^{やま}に捨^すててくるようになってしまった。

親^{した}しくしていた高木^{たかぎ}さんが亡^なくなって穴^{あな}に埋^うめたが、雪^{ゆき}が解^とけてからお参^{まい}りに行^いっ
た奥^{おく}さんが、亡^なくなったご主人^{しゅじん}の無残^{むざん}な姿^{すがた}を見て正気^みを失^{しょうき}い、月夜^{うし}に自分^{つきよ}の手^{じぶん}で掘^てり
出^だして葬^{ほおむ}ったということがあった。そのような話^{はな}しも、大^{たい}したことではなくて当^あたり
前^{まえ}のようになっていた。

どの人^{ひと}もどの人^{ひと}も栄養失調^{えいようしつちょう}で倒^{たお}れ、眼^めだけがギラギラ光^{ひか}って、動^{うご}けなくなり死^しんで
いった。

そんな時^{とき}、母^{はは}が熱^{ねつ}を出^だした。身体^{からだ}が弱^{よわ}っているので危篤^{きとく}状態^{じょうたい}となり、明日^{あす}をも知^しれ
ぬ命^{いのち}となってしまう。お医^い者^{しゃ}さんがいることもなく、薬^{くすり}もない。ただ「日本^{にほん}に帰^{かえ}
ろうね」と励^{はげ}ますだけだった。それでも少しづつ元氣^{すこ}になって、危機^{げんき}を乗り越^きえるこ
とができ、暖^{あたた}かくなるにつれて動^{うご}けるようになってきた。

ここで生^いきていくことはあまりにも厳^{きび}しいので、なかには脱走^{だつそう}も試^{こころ}みる人^{ひと}も出^で
きた。父^{ちち}も私^{わたし}たちや仲間^{なかま}を励^{はげ}まし、「ここ^こにいては死^しんでしまう。やるだけやってみ
よう」ということになった。

計^{けいかく}画^たを立てて明^{みょう}朝^{ちよう}に決行^{けっこう}という日^ひ、誰^{だれ}かの密告^{みつこく}によって元氣^{げんき}の良^よかった男^{だんせい}性^{せい}12
人^{しゅぼうしゃ}が首謀^み者と見^みなされ、猿轡^{ざるぐつわ}をされ連行^{れんこう}されていきました。

捕^{つか}まった人^{ひと}たちは拷問^{ごうもん}にかけられた。苦^{くる}しみに耐^たえられなかった人^{ひと}は、舌^{した}を噛^かみ切^き
って果^はてた人^{ひと}もいた。空腹^{くうふく}に耐^たえることができずに餓死^{がし}した人^{ひと}もいた。

幸^{さいわ}いに父^{ちち}を含^{ふく}めた3人^{ごうもん}がこの拷問^{ごうもん}に耐^たえ、疲^{つか}れ切^きって歩^{ある}くこともできなかったが、
這^はうようにして戻^{もど}ってきた。その時^{とき}に父^{ちち}は、「どんなことがあっても親^{おや}子^こ4人^{げんき}で元氣^{げんき}に
日本^{にほん}の土^{つち}を踏^ふもう。そして、美味^{おい}しい物^{もの}をたくさん食^たべようね」と約^{やく}束^{そく}をし、暖^{あたた}かく
なる日^ひを待^{まち}った。

食^たべ物^{もの}はコーリャン(黍^{きび}のような穀物^{こくもつ})、マメのかす、凍^{こお}らしたり干^ほしたイモばかり
だった。兄^{あに}と2人^{ふたり}で野原^のや山^{はら}を歩^{ある}き回^{まわ}り、オオバコ^ねの根^ねを「ソーメン」、ナズナを「ホ

ウレンソウ」、ノビルを「ネギ」などと自分たちで勝手に名前を付けて、喜び母に持ち帰った。

ある時、アズキ畑だったらしい場所で10粒ほどのふやけたアズキを見つけた時は、大変な宝物でも見つけたかのように飛び上がって喜び、早速おかゆに入れてもらったこともあった。

6月中旬、父も母も元気になったので再び脱走を計画し、今度は成功した。

京城（ソウル）を目的地として歩き出したものの、大病した母は歩行困難となってしまう。そんな時、父はリュックを2つ背負い、急ぎ足で歩いてリュックを置いて兄に番兵させ、母を向えに戻って背負い、同じ道をもう一度歩いた。

母は何度も「私をここにおいて3人だけで行って下さい」と涙を流して頼んでいた。自分の不甲斐なさでみんなに迷惑をかけ、苦しかったのだろう。父は、「日本に着くまでは、どんなことがあっても頑張りなさい」と口癖のように言って励ましていた。

ある時は、大きな木の下で何日も休み、母の足をさすってあげたこともあった。

そんな時にあるグループと出会い、一緒に38度線（朝鮮半島を南北に分ける境界。北側をソ連が、南側をアメリカが占領していた。）を通過することになった。お互いに励まし合い、助け合って、全員無事に38度線を渡ることを誓い合った。

夕方、朝鮮人の民家に行き、持っていた宝石や衣類で米や水と交換をした。水は柄杓1杯が50銭とも言われた。当時50銭は大金だった。困っている日本人につけて、取れる物は取ってやるということだったと思う。石で竈を作り、飯盒でご飯を炊き、小さかったがおにぎりを食べた。

その後、川原でゆっくりと休み、夜に起こされて、真夜中の0時に眠い目を擦りながらの出発となったが、「絶対に声を出してはいけない。もし見付かったら全員殺される」と言われ、赤ちゃんや手のかかる子供はその場で首を絞めて殺された。泣く泣く我が子と今生の別れをした人も数多く、生地獄の様相だった。

足音すら立てないように息を吞んで静かに歩き出した。真っ暗闇で雨は間断なく降り続けていたが、無理をしてこんな日を選んだ理由もわからない訳でもなかった。死と背中合わせだった。

左側には小高い丘になっていて、その向こうから波の音が聞こえていたことを覚え

ている。どのくらい歩^{ある}いただろうか、あたりが白^{しろ}くボンヤリとし始めた頃、ひとつの
灯^{あか}りが見えた。全^{ぜん}員^{いん}道^{どう}路^ろに伏^ふせ、息^{いき}を殺^{ころ}してじっとしながら「これが最^{さい}後^ごか」と思っ
た。

幸^{さいわ}いその灯^{あか}りは、南^{みな}朝^{みち}鮮^{せん}側^{がわ}の見^み張^はりの「早^{はや}くこち^こらに来^こい」という合^{あい}図^ずだった。
全^{ぜん}員^{いん}あまりの意^い外^{がい}さにただ呆^{ぼう}然^{ぜん}としたが、やがて我^{われ}に帰^{かえ}り、全^{ぜん}力^{りよく}で駆^かけ出^だしていた。
足^{あし}の悪^{わる}い母^{はは}も泣^{なき}きながら痛^{いた}さをこらえ、み^{みな}なより遅^{おく}れたが、どうにか南^{みな}朝^{みち}鮮^{せん}の領^{りょう}
地^ちに入^{はい}ることができた。

そこにはテントが20張^{はり}ほどあり、38度^ど線^{せん}の北^{きた}側^{がわ}から逃^にげてきた人^{ひと}を休^{きゅう}養^{よう}させ
るよう^{じゅん}に準^び備^びしていた。D D Tをかけられて予^よ防^{ぼう}注^{ちゅう}射^{しゃ}をした後^{あと}、1杯^{ぱい}のおじやをもら
うことができた。

テントに入^{はい}ることはできたが、母^{はは}は極^{きょく}端^{たん}な緊^{きん}張^{ちやう}状^{じやう}態^{たい}から解^{かい}放^{ほう}されたためかすっ
かり寝^ね込^こんでしまい、1週^{しゅう}間^{かん}ほど起^{おき}きることができなかつた。また、ほとんどの人^{ひと}が
お腹^{なか}をこわし、大^{たい}変^{へん}苦^く労^{ろう}した。

その後1ヶ月ほどで引^ひ揚^き命^{めい}令^{れい}が出^でたので船^{ふね}に乗り、それから3ヶ月ほど船^{ふね}での生^{せい}
活^{かつ}が始^{はじ}まった。船^{ふね}での食^{しょく}事^じは朝^{あさ}晩^{ばん}に1杯^{ぱい}ずつのおじやだった。お腹^{なか}が空^すいてどうしよ
うもなく、栄^{えい}養^{よう}失^{しつ}調^{ちよう}となつて瘦^やせ衰^{おとろ}えてお腹^{なか}だけがふくれた。しかし、「この船^{ふね}は日^に
本^{ほん}へ向^むかっているんだ」と言^いつて歌^{うた}をうたい、「日^に本^{ほん}に着^ついたらおはぎをたらふく食^た
べるんだ」とか、「おすしを食^たべよう」などと希^き望^{ぼう}と夢^{ゆめ}を語^{かた}って励^{はげ}まし合^あった。

ようやく日^に本^{ほん}が見^みえてきた頃^{ころ}に船^{ふね}の中^{なか}で伝^{でん}染^{せん}病^{びやう}が発^{はっ}生^{せい}し、約^{やく}1ヶ月下^げ船^{せん}するこ
とができなかつた。下^{しも}関^{のせき}（山^{やま}口^{ぐち}県^{けん}下^{しも}関^{のせき}市^し）をうらめしく思^{おも}ったほどだ。

1946年^{しょうわ}（昭^{しょう}和^わ21年^{ねん}）7月^{がつ}、1枚^{まい}の毛^{もう}布^ふと乾^{かん}パ^ぱンをもらい、消^{しょう}毒^{どく}されて、無^ぶ事^じ
に帰^き国^{こく}することができた。父^{ちち}の実^{じつ}家^かがある相^{あい}沼^{ぬま}へ帰^{かえ}った。

当^{とう}時^じ、北^{ほっかい}海^{かい}道^{どう}新^{しん}聞^{ぶん}でも一^{いつ}家^か4人^{にん}が全^{ぜん}員^{いん}帰^き国^{こく}したことが報^{ほう}道^{どう}され、祖^そ父^ふをはじめ親^{しん}類^{るい}
も大^{たい}変^{へん}喜^{よろこ}んで迎^{むか}えてくれた。しかし、食^{しょく}料^{りょう}事^じ情^{じょう}がだんだんと悪^{あつ}化^かすると、「よく食^た
べる子^こ供^{ども}だ」と陰^{かげ}口^{ぐち}を叩^{たた}かれ、辛^{つら}い日^ひ々^びも送^{おく}った。

「戦^{せん}争^{そう}ほど悲^ひ惨^{さん}なことはない」

「戦^{せん}争^{そう}ほど残^{ざん}酷^{こく}なものはない」

と有^{ゆう}名^{めい}な詩^し人^{じん}が言^いっている。

戦争を体験した者のひとりとして、誰もがあの苦しみを味わうことがないように、戦争を知らない若人や子供たちに伝えていきたいと思う。



地図：OpenStreetMap（オープンストリートマップ）より

発行日／令和 4 年（2022）6 月 1 日

編集・作成／江差町教育委員会

〒043-8560 北海道檜山郡江差町字中歌町 193-1